

紀伊國名所圖會

二之卷
海部郡

117
1550
3

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100

圖書室



四條大納言遊院 玉露浦神社 神樂舍 宝庫
岩根庵 私家
天國宮 浦の初嶋
勝山
東山宮 拝殿 唐門 神樂所 樓門
仲實堂 藥師堂 開山堂 三重塔
経院 箱山 石梁 庫守国基
大相院 玉出島 生天池
東山宮御簾所 天祖神像
天祖神像



根上り松

根上り松
根上り松の南郷セハナリモササガのまづく其根もくあらそほろねをまわる
の世よ冬もく序解のあらうとうそまくはく次上とく

根上り松のまづく根上り松のまづく

はましやつりのみの日乃寒のまづく

源 安 足

冬の寒や根上り松のまづく

牛 京 石

雲室

雲室名は隱陽寺
五山の宝殿天國寺ふ舊山
本名大徳院

牛 京 石

根上り松の本殿へ阿を子孫庵へ
本殿へ本地絵へれ軍地藏
にへり羅闇淨の眞毒と降伏へ平安寧の寺復と
くく恩厚慈心の眞勝とあへり利益あるわく衆生を教
まなみの感應ひよくして靈験明んあくさく
詣人間約々毎歲六月廿四日から十日ゑく群生凡日

弥勒寺山

近卿の方者集會へ花角カとひくに珠々山上風景の勝
燒たる西かへ爲海漫へての三圓の眉のふく眼下に
吹上のゑ小ゆの浦冲れ鈎を小舟行よりもく業をぞ
りく渡る多白乃浦故名冲山ニ高の巖邊やくゆぐれむ
なつごくつづく

難波來由之車

あらん法敵織田内府信長公にへ偏よ日蓮派の僧徒日乗お
が偏執ひ訓説を信ド元龜元年九月十三日よりて大坂
石山よ仇アトヨう法圓の門徒こかくふ蜂起へて船と
ひそかくざるのもなく合戦へんゆくあると



信長公よりくわが諸勢より軍馬としひよふ歎をく
淺井佐久本多倉田の強敵す。既ふとく攻せられ
とひやうを害せ。固の城もとも不日落。さるともも
あらざる所の所せつづく。あき固とて。唯てそ
の堀のまへ。諸国鳥合の門をこなはまつて。既あらふ
かく。まことに。とくべつとも。たゞ。小姓。おほく。うる
まく。門を。あらむ。無二の。雄様。まろゆ。ちう。外中南紀
難波の門を。おとく。鳥居。又。洞窟。を。か。軍と。そ。り。と
將を。か。而。今。御堂と。伝代。と。鳥根と。御宿。さん。よ。み。て
石山。す。す。の。あ。づ。ぐ。と。そ。意。よ。五。年。二。月
十四。三。日。上。宿。し。明。晩。を。ふ。宿。一。難。波。伝。代。の。あ。と。云
議。一。う。ふ。り。と。難。波。二。成。れ。び。根。木。の。根。木。二。云
信。長。方。に。ま。わ。べ。は。謀。一。あ。ら。や。う。び。佐。長。

おおきふとろごじす。みだら。謀。決。一。月。十九。日。い。く
河。川。若。山。に。出。長。一。大。將。ひ。秋。田。城。之。助。忠。北。畠。中。将。修。雄
織。田。大。佐。助。林。二。七。等。す。べ。十。九。ヶ。圓。の。精。兵。と。下。て
お。じ。う。じ。う。に。経。よ。難。波。か。れ。と。く。伏。闇。は。け
と。よ。ね。く。の。更。か。く。わ。款。弥。勅。寺。か。く。要。若。く。空。か
小。難。波。の。上。下。名。神。波。も。は。波。の。邊。の。内。の。中。か。捕。妻。め。い。と
く。と。か。埋。く。人。馬。の。口。を。ち。る。ま。ん。ゆ。へ。を。す。一。今。や
と。く。侍。く。一。先。鋒。ふ。進。一。佐。久。間。右。馬。門。守。別。所。小。ニ。鳥。向。徐。右。馬。門。射。塙
全。鳥。ち。ん。一。騎。か。ゆ。千。の。重。將。お。こ。成。な。び。わ。の。場。と。事。内。
を。く。て。月。二。日。押。轄。か。く。難。波。か。れ。待。す。り。と。か。ま。へ
を。く。て。弥。勅。寺。山。と。元。く。北。の。峰。よ。と。り。と。か。ま。へ



松原三吉支本右衛門を支宮平左平を支藤左兵衛を御内
侍五百人雜々川にて紀の川のうちを小舟に舟運本三びく
あうほも設一桶壺よしの足をあわせまんとん中の手に原見
見なくす牛車と東海の山の岩のへと本孫市ふとどに乾源
内を立外がなえ侍士名草二那の旁名の御士をきとく
この船と舟はねす甲崎の岩のへ圓梯部をまは四郎八郎今井
松七渡邊左近門とくを寄に大舟と立すと共ひ五百人
中手の味がんちうを令を南へと走る名をいはす
とく上田刑部袖と立郎左衛門を放ま意ニサバヌキその
主翁与翁のとめし八百人弥勒寺山の幸陣の的場源四郎是
ときわら舟かうあるのやうじく弓鳥流とほざけくもつ
をくじら先をすら舟を取へわもくく敗きくすく馬を
廻さんとすがゆ日や年毎うと退潮をまぶす水をま

沙場へと引まくとて中はすけ一穿ん溜くワロとくわ
種はまくをまくとてはばとくわゆとくわゆりもあくと
はめ引つえんぐふをすすねまさらから手の下に百疊五十騎
下まくと討例のとくと卒船とくとくとくとくとくとくとくと
街とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
ほくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
もじがらの太軍とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
斯く鐵國方とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
くとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
勝利をくわび世運とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
あくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
差とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
國戸村たる矢官の廣あれだりほ水くとくとくとくとくとくとく



日あくつね～～さかがる吉倒のまどかにしたの浦

相手が渡ふはまもとて雜賀浦と名づけ毎年四月十七日

東照神君の御坐船ふ供奉すたゞまつらひなうとせ

観口不^レまくまく御上り御下り御内裏御御内裏御御内裏

雜賀序

甲子の冬十月幸紀伊国時作致

雜賀浦

左日鹿里由背^{シテ}上尔所見奥鳥清波倫余同^シ者

梅溪翁舊宅趾

本國の傳^{シテ}日鹿の浦爾出見者海人^{シテ}燈火浪間從所見

藤原卿

支本

紀の浦やまうの浦のねうりと春の日^{シテ}く海士人

梅溪翁舊宅趾

江倭訓相近故後人訛^{シテ}無他所稱小江浦者父老相傳昔者海水與

小江の浦

江倭訓相近故後人訛^{シテ}無他所稱小江浦者父老相傳昔者海水與

中古壅闊為陸云

名草演通入此所

正治百

きみのうをの浦のあらうりゆひてねがの園のま

正三位經家

雜賀崎浦

山地漁戶^{シテ}一西南の於に勢^{シテ}事^{シテ}千石の岩^{シテ}壁^{シテ}下不^{シテ}

鷹巣巖

絶壁^{シテ}によく隼^{シテ}巣^{シテ}居^{シテ}しゆよ^{シテ}岩間の

生^{シテ}れ風^{シテ}搖^{シテ}きて空曲^{シテ}うじり^{シテ}わむ^{シテ}すすふ

たゞうにあ^{シテ}教^{シテ}かづら^{シテ}やと^{シテ}みよ^{シテ}お^{シテ}石^{シテ}を^{シテ}打^{シテ}

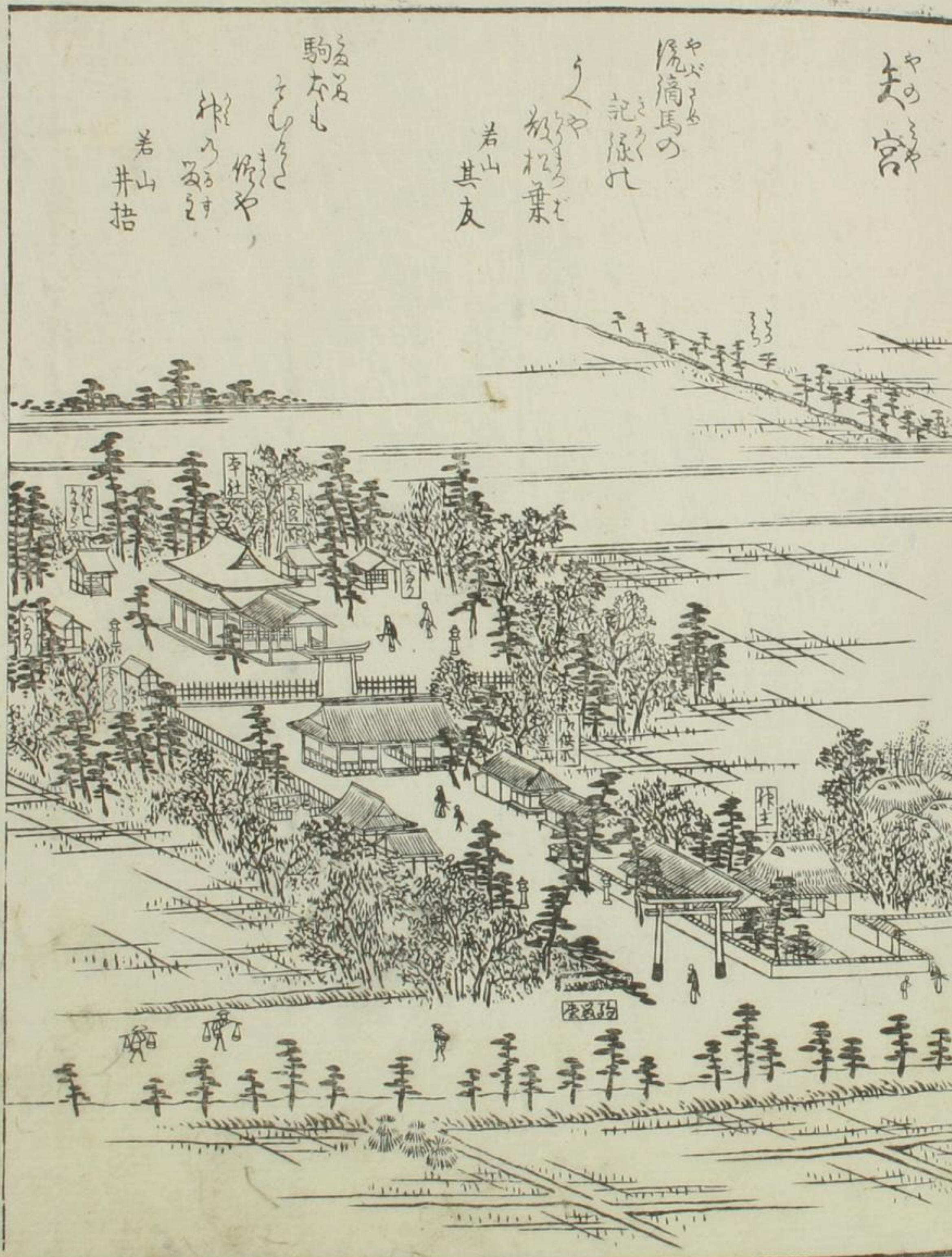
落^{シテ}海^{シテ}と^{シテ}め^{シテ}口^{シテ}の面^{シテ}九^{シテ}輩^{シテ}張^{シテ}本^{シテ}と^{シテ}新^{シテ}門^{シテ}と^{シテ}

すすま^{シテ}やあ^{シテ}候^{シテ}長^{シテ}公^{シテ}不^{シテ}候^{シテ}と^{シテ}いん^{シテ}も^{シテ}お^{シテ}反^{シテ}ふ

ら^{シテ}たる^{シテ}べ^{シテ}と^{シテ}腕^{シテ}諸^{シテ}國^{シテ}の宗^{シテ}に^{シテ}因^{シテ}反^{シテ}お^{シテ}セ^{シテ}一^{シテ}ば

賦 漁 义

中 別



帝門主に大むねうる國を御合辟ありざら疑を過もつる
 づそりて教め上人と御勤めの旅宿あり黒く織田から
 大坂へ討人とて向ふ新市門より大坂を止むやゑす雪
 に御流瀉すたまひて天正八年八月泉久佐野川の
 猪市ちゆゆみの公俱やくと山あよしをなまくうどを乞
 ふ織田方よりへ至候とおく兵士とぞかしてゐるまつす役
 小まき勝利も危く、がやと思ひづひまわ一も難かずの行
 の内よこもくはよもよもあらくりやうじのぐやま
 で一ト一ト御門をひそふまくやまくくちん
 滋のあよきひきやる親ぢへきの裏ひすひよしねじ
 よきあよびまくひとくん量ひうしてかくのびくくや
 お追ひ花はゆく裏あらわ
 姜濃
 惣
 風
 ヤの
 宮
 例
 家
 九
 自
 十
 月
 流
 遊
 馬
 牛
 有
 祀
 神
 座
 武
 角
 身
 命

本社 健吉 春日 飯毘羅

駒留の松 金剛山に在り

及墓除の神れ 狩殿にあり

馬留の松 金剛山に在り

此山谷

社名不白す。け地へ雜樹生る深林たる里人ちふ怪

政を平めうつて是をひらひと里人ちふ怪

ひらひと里人ちふ怪と探るて隻の白羽の矢をひらひと里人ちふ怪

をいとむ崇祭へば神すみやく正に憑記口アシヒ音

こし軍神をうかがひ者汝尊崇祭べ立すと此云を

御事と云ひてすゞと口見をあわう矢と云ひてゆゆと

按此又は田部の御神と云ひて姓氏録山城国神別矣
田部。鴨縣主同祖。鴨建津身之後也とあり。下すみやく余彦天
皇神後也。欲向中洲之時。山中險絶。跋失路。於是神惡命孫鴨
建津之身命。化如大鳥。翔飛奉卓遂墮中洲。時天皇喜其能効
特厚褒賞。是鳥之号。是始也。是鴨建津之身命。大鳥
と云く。皇師と云ひて。是の世より。お御にて軍の事
なりとす。あり。社はの御座に軍神とあるぞ。と云ふ。

三十六年五月織田内府七防おもと雜畠を攻る。ふ

あらそ村民もよ殺さばく。而して冥助ひづじく
神巫祝は死しものぬく敵兵のうちのる。而して二日

退済のひとと朝す。ちふ朝すとおもてゆてゆどく
退済。しやんよ空へく。満すとあつらが集まつて
詫宣のひととおもてゆての勝利と。ちふ村民の渴作

太てたゞ遙に離せ。二十ヶ村の生土神とて崇む。まち
かく。ねがの影あらうふ。同菴のちうひ流すに冥助
の應驗つゆふあくと。ちふ

五百羅漢寺

五百羅漢寺。五百羅漢寺。五百羅漢寺。五百羅漢寺。

繪馬持。繪馬持。繪馬持。繪馬持。

五百羅漢

秋葉木之社

秋葉木之社。秋葉木之社。秋葉木之社。秋葉木之社。

秋葉木之社。



當社の靈験もくの中に
弓矢箭杖の様雜をもとより火燒死の危
急とのよれた事これら皆の難とまゆるをなす中古
甲斐國丸坂の軍勢の私棄の社火燒れんとく御所ふ
少をかくしも様のう下り自小廢モつて無火度全に無
の樹皮やくへりと馬くるとそろアヘラ少体後の神
徳度生ひ多めの方便は内アキニ伝教只どアキニ
少すらあゆみあけむ一あくとよう遠近とつだ
老若男女千度踏足すめう高齋塞垢離火難
立寫

卷之三

寒びちう立シタあんの——

阿頃波水



芦辺寺回跡

法師谷

演光寺のうしろの
たんをつゝ

塊の宮

宗祇の塗

日正にあり。あはへ妹背ふ。一
西院を。御院を。奈居して。山松
樹を。御院を。奈居して。山松

小町ヶ峯

下弱浦

野田

好古尚甫

標勝境壯觀天下奇靈懸寶符神功極二儀高
弱浦遠眸南吞三峯接十洲激浪噴雪動地軸
石橋相躋向背恍望飛閣聳雲中雲中奇觀無端倪。
船舟指頭淡島青一粟天柱想望幾千秋玉島鐘秀鷺
路轉開琳宮松汀鶴唳沙觜雨葦岸人倚酒旗風龜巖
繆石躋向背恍望飛閣聳雲中雲中奇觀無端倪。
百世日月懸管公祠廟欽威靈蒼翠深籠古松烟宵旰空傳
神祖宮殿摩蒼天駕雲石磴排星躔昇平久沐至治澤本支
石橋穹窿臥長虹崖岸人倚酒旗風龜巖
可賦趣可樂胸中山水元領畧山水爭衡來奏奇胸堂為之
漫磊落杜觀難極奇中欲賦筆相閣

芦辺浦

新勅

日正にあり。あはへ妹背ふ。一
西院を。御院を。奈居して。山松

新勅

玉葉美の浦より經くに。芦辺の田鶴のよしとよむ後づる日正にあり。あはへ妹背ふ。一
西院を。御院を。奈居して。山松

新勅

日正にあり。あはへ妹背ふ。一
西院を。御院を。奈居して。山松

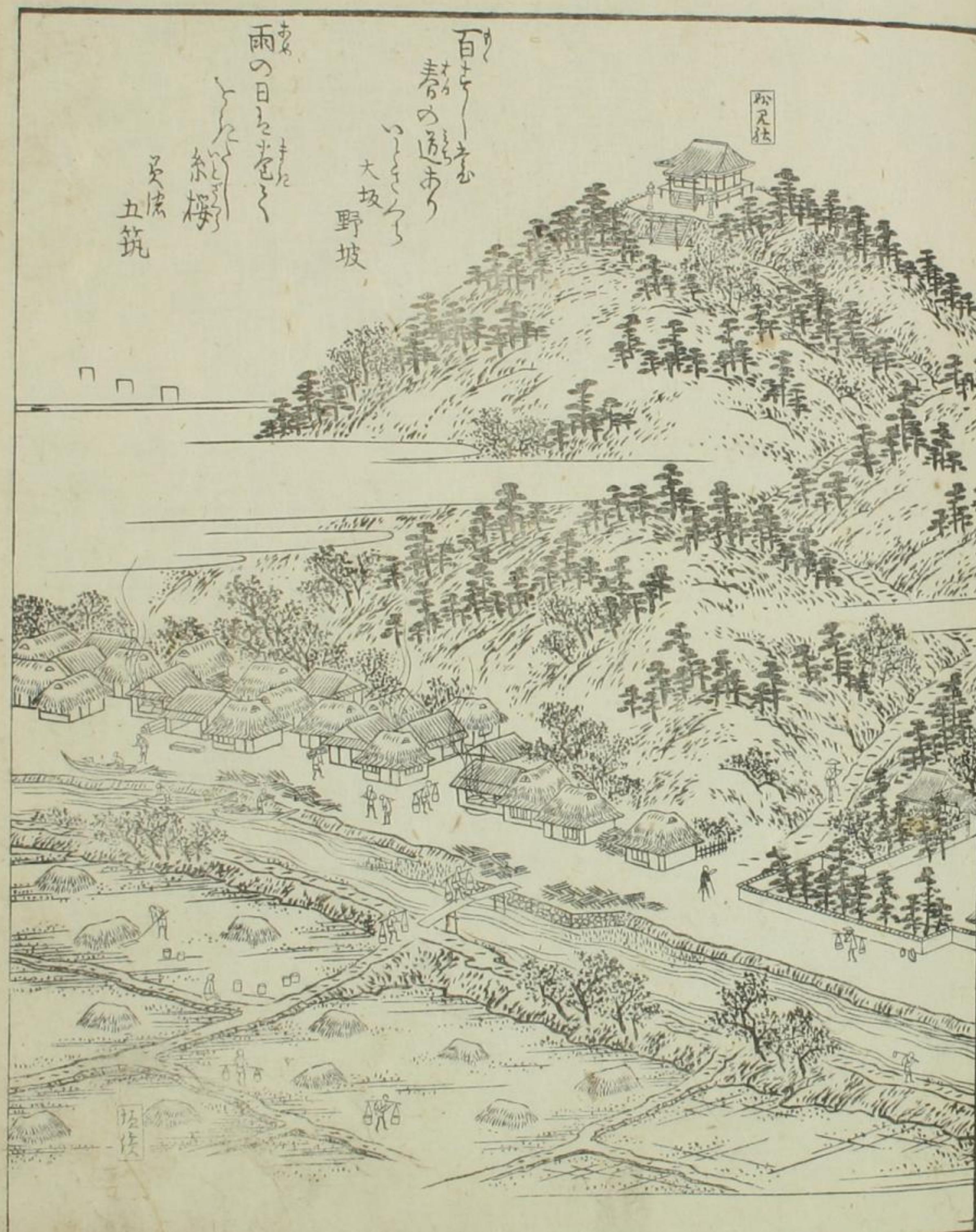
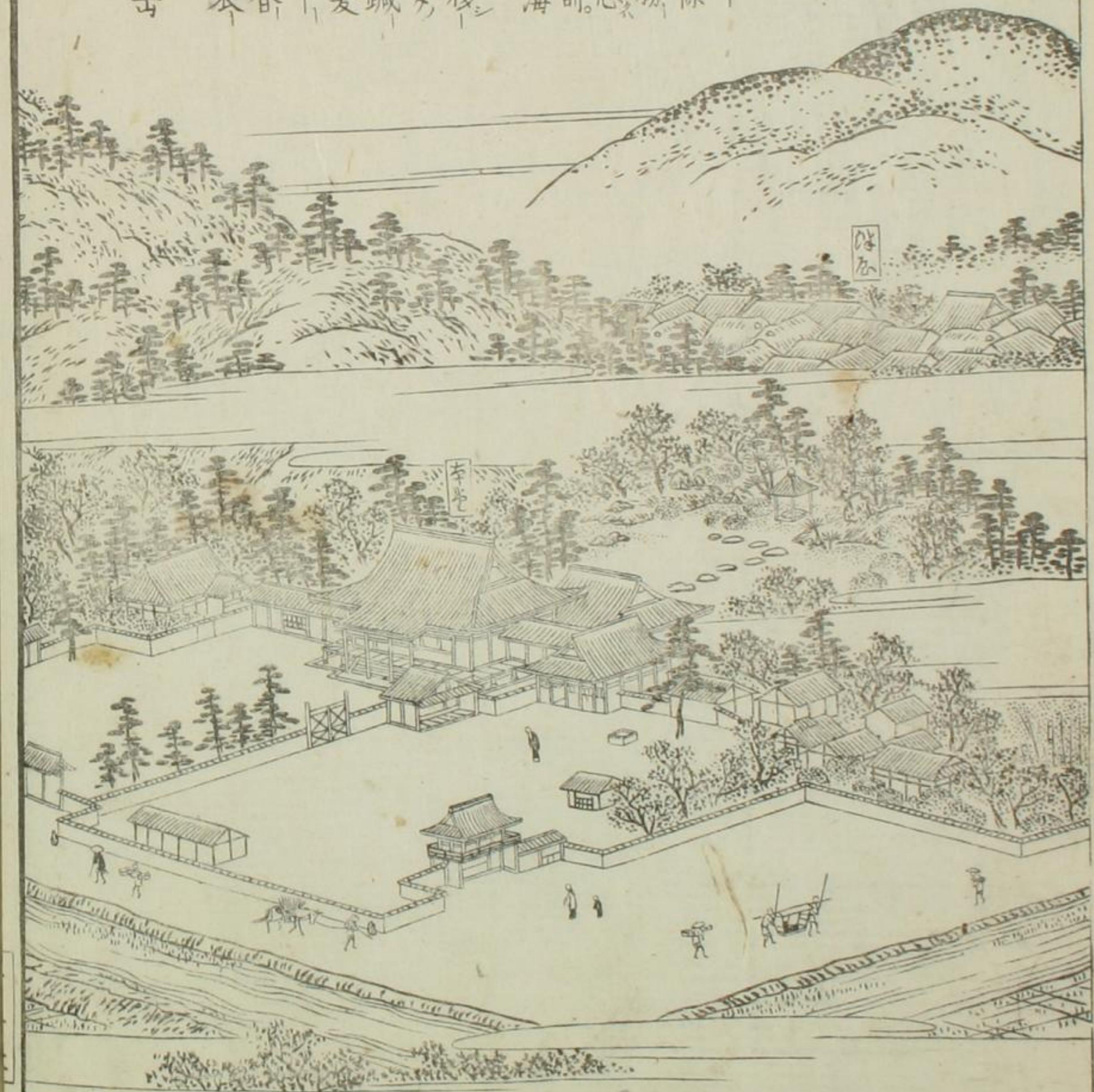
頃阿法師

養珠寺
妙見堂

養珠寺賞
垂絲櫻花

夜來新雨足。枝放十分研。萼外比梨暖。條
々借柳懸。幸秋地勝。旣參醉花臺。年但恐
暴風夜正逢。寒食前。祇南海。

松毎



書院

林泉

思齊泉

南龍院殿

香樹院殿

妙見山

中央妙見菩薩

左三十番

五番善神

右東明神君

南龍院殿

南龍院殿

南龍院殿

南龍院殿

南龍院殿

南龍院殿

南龍院殿

牛角石

右牛角石

左牛角石

南龍院殿

南龍院殿

南龍院殿

南龍院殿

南龍院殿

南龍院殿

南龍院殿

南龍院殿

南龍院殿

諸事應三年の佛造

右諸事應三年の佛造

左諸事應三年の佛造

南龍院殿

南龍院殿

南龍院殿

南龍院殿

南龍院殿

南龍院殿

南龍院殿

南龍院殿

南龍院殿

登妙見山

右登妙見山

左登妙見山

南龍院殿

南龍院殿

南龍院殿

南龍院殿

南龍院殿

南龍院殿

南龍院殿

南龍院殿

南龍院殿

望海閣

右望海閣

左望海閣

南龍院殿

南龍院殿

南龍院殿

南龍院殿

南龍院殿

南龍院殿

南龍院殿

南龍院殿

南龍院殿

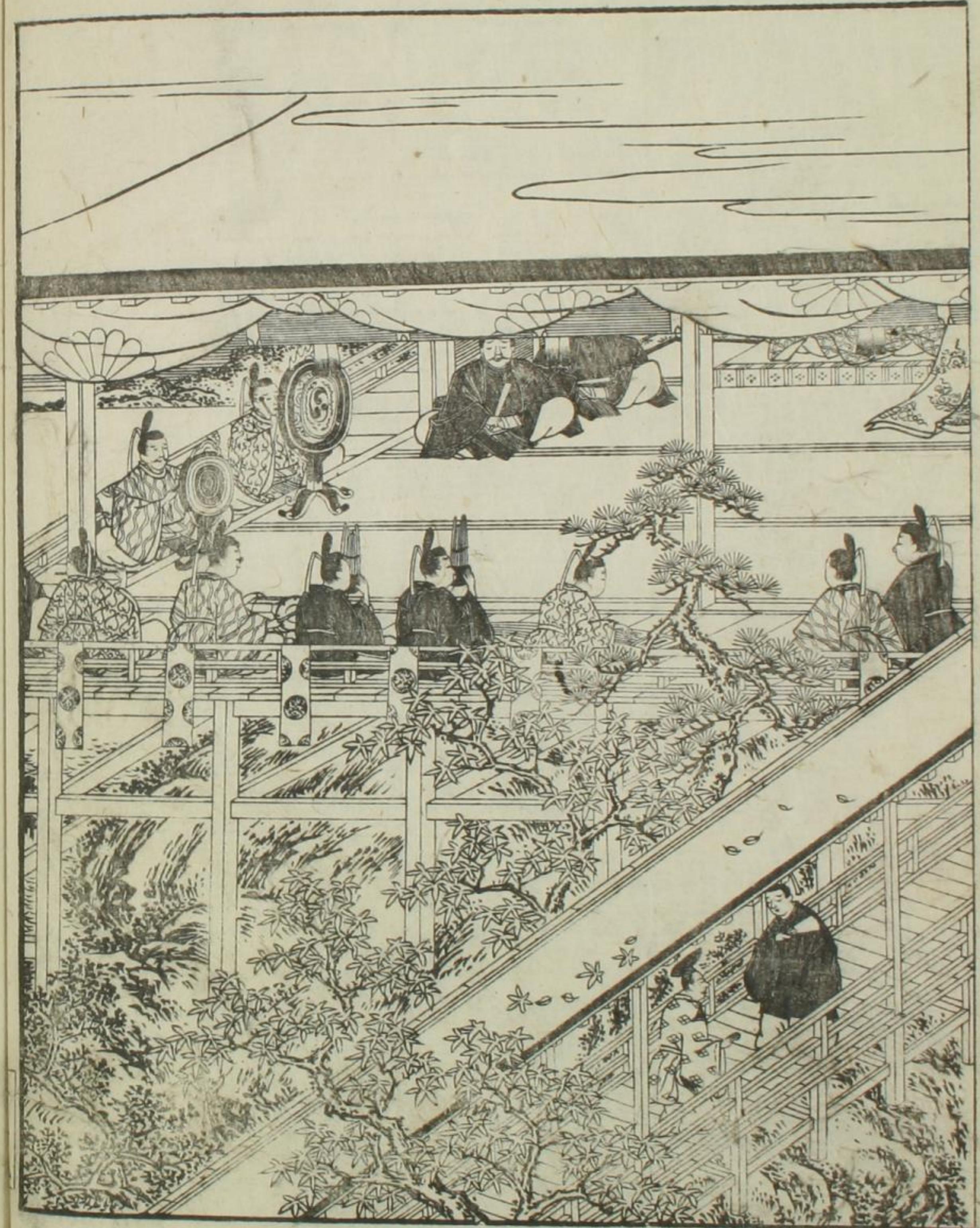
望海閣

右望海閣

左望海閣

南龍院殿

望海樓
聖武稱德兩帝
御望海樓奏歌
舞雜伎



郭公山
今妹背山とへつての名也。今もまだの餘りにまづき
え月のまづけちるはすがてはくまつまつと
うのあんねんうきさく
わうとみゆきも又風もやまと

木ノ行方不明

無名氏

かく えんちくや 五月の玉は
月そな夕りやまよ あく 炎に

經王堂

岩谷陀利加蘿多攬の梵淨
巒人の筆をうかんめやまと
りけ地を

御とつまみ毎御玉のやうあう一とうかくつまうへゆくけ地を
命玉ドキトモくろ金ふとくもんねうて微とくろよキアリ
多寶塔
妹山にあう乾谷に御通阿彌迦の二さんとよふかえはまわ様に代のくわん
うのゆうとうおうおうううううううう乾谷に御通よき尼の腰骨とれよ先なまふ
唐門 端門 自然石階櫃 隣殿
塔頭 海禪院

卷之三

三十二面の御追縛と あと かんづん

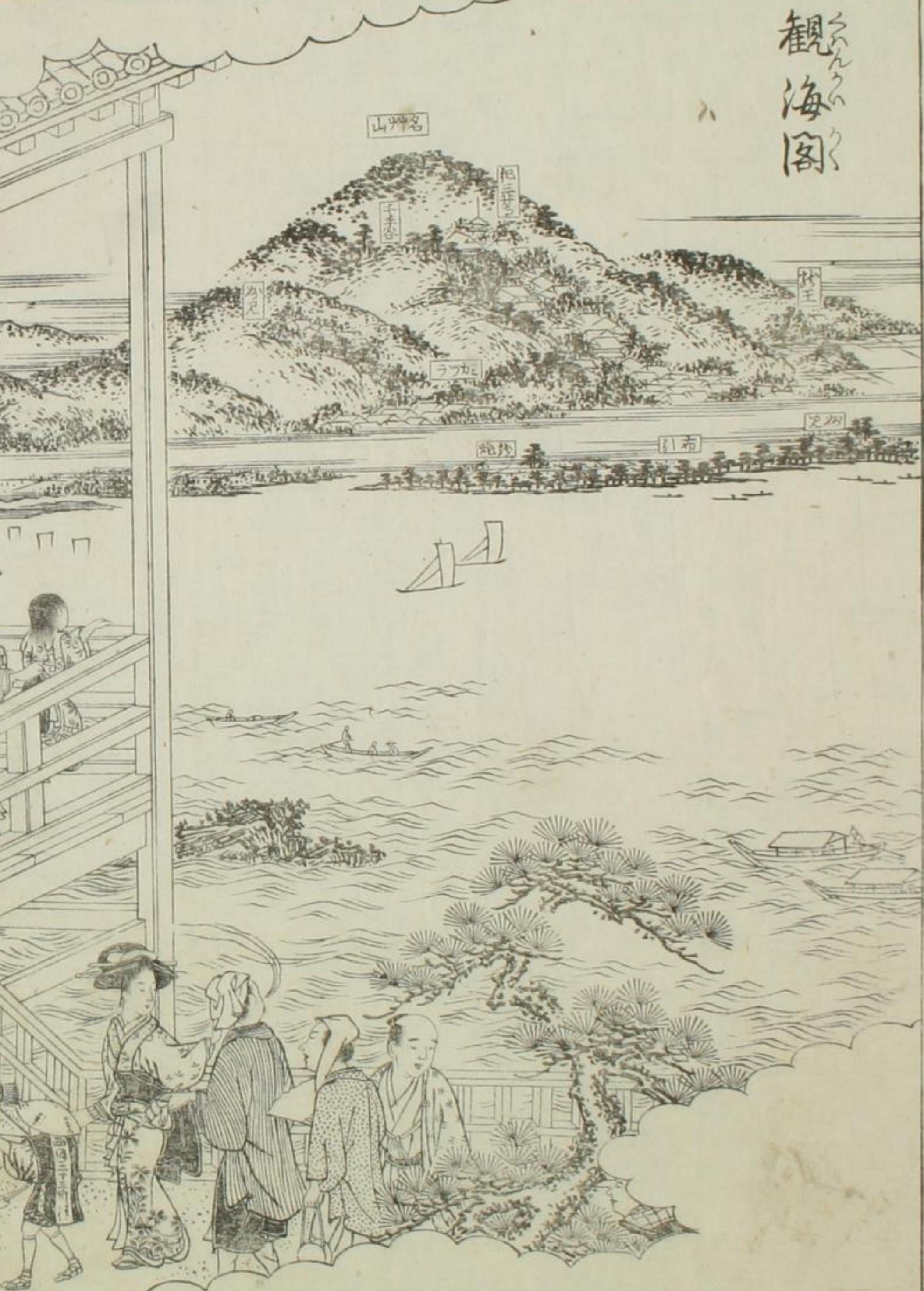
左近の小豆は草元の
左院を上皇の睿圓よ達へそ尼の

従ふ深き歎感のあまう

あよく
あわせ

公卿百官の所書題目をと総てからとあくまでも諸國より集め
の歌目石がわ二十一萬とすむうち空塔の下にあく窓を
收たまつ草庵の儒窟を成ほる長田源氏も三世通玄
院日演上人あれ今ゞ蘇賀山の記とはててある
け地とてやまくとてよ景色たゞや相川山のる山川竹生
ああさんとて山山山のれのれのに中れあう中古社
山并とてのれのれとあありしあふ御山塔ゆま達のとて
竹本丹波守の山度りてのれのれ石山ゆらん歩を集
てこまを安どもあひだ又倚み月形の石山うぢりぬにて
まくおとてきまキリとヌ石山てまね来りとくま安
いきゆかくら山人あまへわりひとたまびとくま
雄およ御はると到りけふ塔ふるら
ま經の勢結ふまくと下れ建らるの碓碓の石よろと

觀海閣



妹背いもせよとあたひうとを此當このまへに伽羅山からざんにさづく石袋
おお下おト住すきのれち出ですよりのとたくけりやくらつ面
の入いらいくあくくや石面せきめん僧そうにて伽羅の本理ほんり
御ご小こびとびとかくくりそうちそうち 國祖君こくそくん仰お遣しええあり
ニのの松まつははととのめくくる石いしととくくおれおれ 山上さんじょう
ゆゆ居ゐままてて後あとへ石階いしえぐりてぐりて小樓ころうああききららめめる名なふふあ
わわくくののああ面めんの名な山さん有ありりふふ絶ぜつ妙めう法ほう絕ぜつだだり
ががるるややととああたたに脚あし裏うら地ぢああるるも下し民みんの社しゃ船ふねととるるとと小こ四し季き
ととううくくのの間ま勤げんああくく富とみみははとといいああけけままううおおががくくくくみ
くくもも身みににあありり人ひとははとといいああくくままううばば海かい者しゃ
接せつすすよよ正まことに玉たま牛うしののききりりくくははままれれ起おるるよよりりんんに
特とく修しゆ多たててああくく妹いも背せよよととののうう星ほし霜さむううりりくく
古いたた雅が名なとと失うくく人ひとととくくのの不ふ名めいははととああたたままととたた神かみ等とう

ああわわららふふああううかかててゆゆくくわわううたたぬぬくくここののふふ混こん雜ざつ
してしてりりきき非ひと辨べんざざくくののとときき一い遺い恨うききううちちくく

丁未中秋與諸子泛明光浦

抵たど南海

明月何か月づき不い三さん九く天てん時とき何か歲と秋あき不い中なか。唯此良宵清影多。今年
幸又無颶風。煙消雲盡江天晚。斜陽西沒金霞紅。凜然明鏡
髮可鑒。露濯桂香渺。蟾宮此時良約不愆期。此夕良會四美
同。地上何處無好山。天下何處無好水。不如江南山水美。山
秀水明綠。雲裏琴浦側。前白練開。玉津宮外金波起。雙々宿
鷺依苔礎行。新雁落蘭沚。城中何人不上樓。城外何人不
登舟。不知誰家能望月。不知何人能解遙賦成空想。西園蓋。
繁絃急管徒嘲啁。豈如文場人如玉。倚欄水閣看白鷗。半夜
長風天上来。吟鬟颯々不可留。月華高昇金剛峯。直命蘭蓀
放中流。與逐星槎凌霄漢。身生羽翼度瀛洲。浩歌醉飲出塵。

埃岸上人言李郭傳御杯向天仰大笑明月落杯河影浮使

君特贈紫錦鱗兼之玉醪紅新芻高僧亦領香積厨石花雲

芳秋載乘住期歟此人不醉嬪娥笑人定白頭不情十千盡

一復賒為君掃盡萬古愁君不見治差丞相氣如虎遷都自

謂用天府南渡衣冠卿夢冷掉月淡島及明浦借問人與何

孰有無唯聽蘆荻風今古人生歡樂柰老何帳望斜月沉江

波嗟我安得虹蜺長萬丈躡作天梯挽回玉轡於金樞之何

此夕久尋君馳使賜鯉魚及美醴養珠寺隆上人聞予船過門前贈行厨

妹背海苔此家後日送別酒也

山窟乃祠王使君南歸之處也

此上古王使君之神祭祀之神幸有之而猶行の旧跡あり

庚祿年中十月一日祭日此山窟へ神輿渡幸有之れりて風

の御坐ひと唐の事を云ふ事ありて是が御大御の御

御記に之をもどり

彼急に後アム神輿とりりやヘナヒ漂没アム正のうち神幸
を止めある事アムヒテアム御明神の神輿アムロ(度)止
トあつたる事アム其由アム御明神も御神母と慕うセタ
まし御馬アムアムヒ通ひもひきと母生明神安アムト
ル御食アムハ御玉神(御神母)アムト母生明神安アムト
の御坐ひと唐の事を云ふ事アム是が御大御の御
御記に之をもどり



海士人うみびとのさうゆさうゆさんまさんまにやつるふ波ふなとあくを起りん 公任
 あるのそひはらそひはらの松まつの花はなとあわてよもん 少將
 とくへは
 彼かれききれをととようそ岩いわみ水みず新しんと看みる水みず有あれ 公任
 わちのうわちのうのううるにわりわりく
 獨ひとり蟇かに蟹に 蟹にのつものままく
 宮みやの居ゐよめう小こ數すうて色いろ自じく斤きん至いたかくかくの身みと
 獨ひとり蟇かに蟹に有毒あく不ふ可か食し之をく
 船遊ふねう和歌浦わかうら奉まつたけ次つぎをか大人おとな額がほ 南嶋樵者
 檜嶺ひりょう蒼芷そうし古佛こぶつ檀だん入い風ふ梵ぼん目め度と雲くも端は雨あめ晴はる海うみ嶽だけ殊こと明媚めいび天あま接せつ
 烟波えんぱ獨ひとり渺めう漫まん嵯さざ戶と花はな開ひら春はる晝ひ靜しづか漁うお村むら松まつ瘦う夕ゆふ陽ひ寒さむ欲ほ尋たず當とう日ひ
 行宮處ぎょうくうしょ鼓石こくせき驕きょう濤とう響ひびき玉車金
 玉津たづ寫う神社じんじゃ 日ひ本ほんののれ作つく明光浦めいこううら之の靈れい通とお船ふなを配あわすすののううめめる

紀作の事後區くちりせし候。傍にかく出でり。洋殿三十方故仙圖持序。眞甫。三
神樂会。神樂ハ明和中近衛。石檠双芸。開白殿下の御寄附。正徳四年靈元上皇御奉納。金額曰。
神前常夜燈御領御成就書。不思甲斐敦直の範。

内 双芸

神龜元年甲子冬十月五日幸紀伊國時山部赤人作歌一首

万葉 安見か之私朝大王之常宮等仕奉流左日鹿狩由背上尔
所見奥嶋清波激余風吹者白浪左和伎潮干者玉藻荷管
神代從然尊吉玉津島夜麻

返舟

日 真鳴荒儀之玉藻潮干滿伊隱去者所念武香聞
日 玉津島被見而伊座青丹吉平城有人侍問者如何 作者不知
日 玉津考雖見不飽何為而裹特將去不見人為
日 玉津島見く善雲苦無京往而戀思者

日 玉津島儀之裏末之真名仁丈爾保比去名株觸險 人 麻呂
古今 舟泊魚也。浪のまくもみまくのや。玉津島也 あひぐれ
後撰 と舟の満入はとど。船のうなる處もつまはず。 うろこ
金葉 金葉玉津島の岸の玉津島のあひくね名跡さへも
續後 かくもととおどん玉津島すむ入の奏のあひかめ 情緒を支於季
續古 いふうむえ浦風水へとてぬとおどん玉津島を娘 參議ち氏
同 のひとよらわちの浦故ふあくふく君とや侍。玉津島也 指政兼大政大臣
僕古 け度と波音ほくほく。玉津島をもく。玉津島也 岸原隆信
玉葉 三代をかづく。今の大とす。わざをもく。玉津島也 榮成院御製
日 ひくにまくもあひ玉津島と。モ神のくろとがれ
ふかくおにまくとよみかづく。
續手 そくねじ。波底。玉は。おぐもあひうえをもまく。
日 わきの浦。まくらうり。玉は。おぐ。ひう。お

惟宗忠景
前大納言為家

凡雅 玉はぬ身もあすやまつてんみんみんのあ よみとく

新千 玉はぬ身もあすやまつてんみんみんのあ
玉はぬ身もあすやまつてんみんみんのあ

あさ内言お世玉はぬ身もあすやまつてんみん

玉はぬ身もあすやまつてんみんみんのあ

新拾 玉はぬ身もあすやまつてんみんみんのあ

新後老の浪打身もあすやまつてんみんみんのあ

新續 玉はぬ身もあすやまつてんみんみんのあ

新後老の浪打身もあすやまつてんみんみんのあ

天本 玉はぬ身もあすやまつてんみんみんのあ

頬阿法師

よみとく

源親長朝片

津守小道

信実船

大房西光海

松大悟教光尋

鹿園院公達前

大政大臣

白前左大臣

後九条内侍

右馬内為教

慈蔵和尚

法印高家

慈大納言忠良

漁食右大臣

俊 緣

忠 家

行 家

定 家

隆 長

忠 家

成 邸

定 長

忠 家

後京極攝政

大政大臣

名所吹き玉の浦をあすやまつてんみんみんのあ
歌合 玉はぬ身もあすやまつてんみんみんのあ
新六 南都 呪庵 人毎月送りとあすやまつてんみんみんのあ

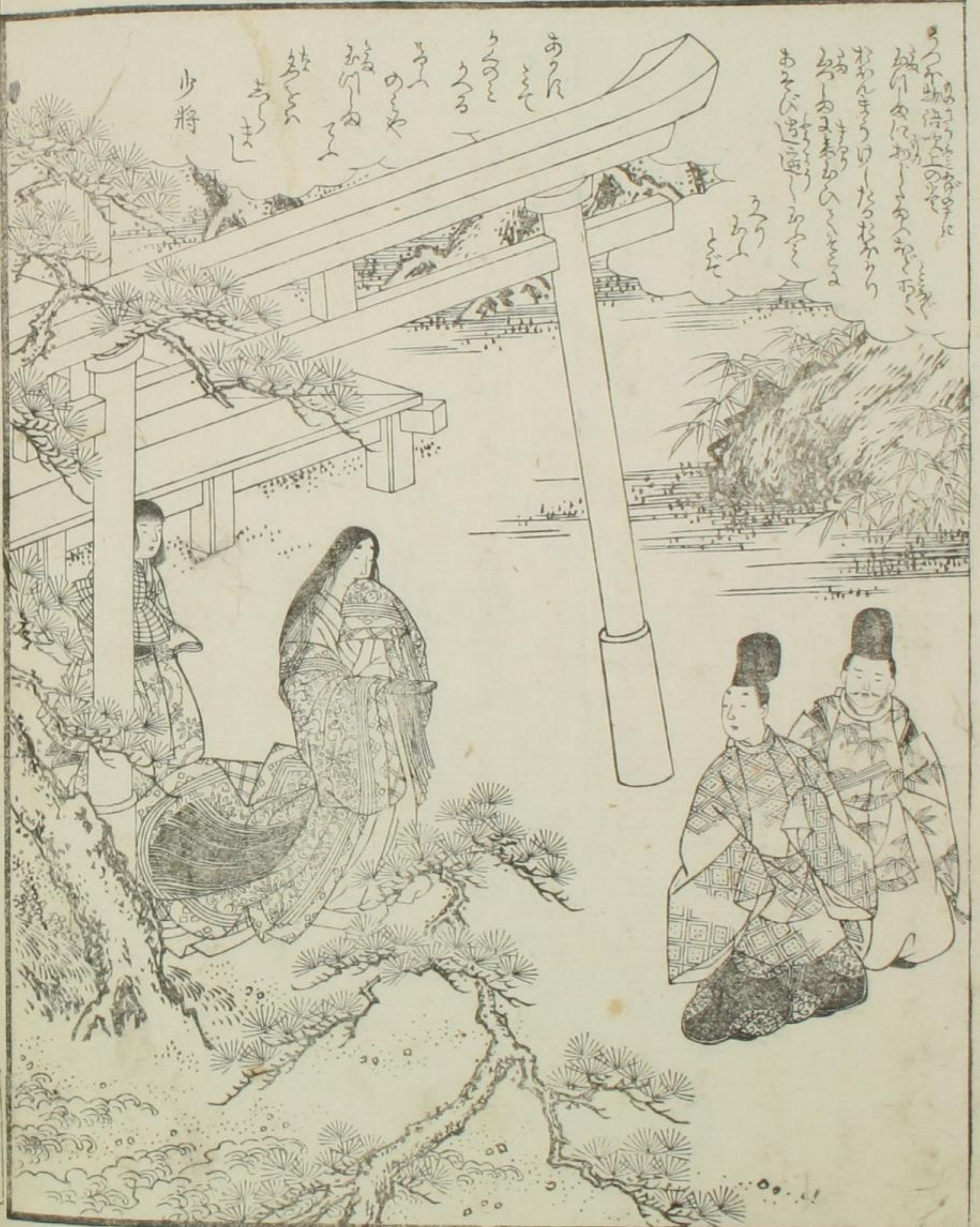
そしに春秋二時乃神祭禮始まつてみち
上皇古今集傳多のとあるをもすより御法樂のと
御製の和奇二百七十首公卿詠奇四百七首合五十首の
和奇神奉納あるをなまくより終り絶く久しく神代乃
官居あよした所處のをす御殿赫々と雪がれり
やまとゆゑ玉出考の久よ百二十种の奇靈すうと雖稱ふ
國祖乃神事奥の力ちひは景と神人合舞アマツヒメノミコト其附とわなま
ともよべ

○玉は萬とづる称呼古今變革ある事
世俗よ玉は神の神と表通姫とづるとわ奇の形とする
と其謂よとづるとあはれ且て袖中抄顯昭云在在京亮被申
位古神主國奉云住吉之奉ニ神をう第四神ハ玉は乎明神即
神通能きうほひかねりて能く好むるゝ又善神体妙能り



年老いたての廟より玉は姫 津守國君
是に吉神宮寺の本尊もあつて御堂と建てて壇
の西より紀陰國へ渡る玉廟の玉は萬葉傳
名通娘のけむと面白うたひく神と汝跡をり
きうとのわらひにだらかに讀くをすき其後のゆ
に唐樂上く裳唐衣をすか十人ぐら出生をくうと
慶ひをうとくとくべた石すく教えの告のぐく石す
く小石をもきり一度に十二顆に破れく壇の飾へ
越々又小畠准后新房卿古今集序に改抄と記す
云五十八代の御門孝孝天皇御脳ありて帝の御體ふ
赤たまゆをする女房はれに立く
立つて又もじせよゆん其名を小石わきの浦波
と呼ぶ誦一念の帝御室の中に誰人ひそむと云ひと

たびのちあひたるも衣通娘をうと見るをあつてからふ
よりてにわ二年九月十二日右大辨源隆行を勅使
紀伊国弱浦につてしとく衣通娘とみゆぬ林とひらひら
以て之とも衣通娘をつうあとども^{ナニ}國史ある
ともあくえうせりて地衣通娘の跡と見る由縁もあり
さうをやすくせりへう詔りほゞうと上の件りくの書
れをあくへく信へう詔りほゞうと年の件りくの書
下りてわくへて考らんやうく唯御りと付づるといふ
をまうからうかね通御書御電後十月御傳衣通娘於紀
あやまちうかね通御書御電後十月御傳衣通娘於紀
奏ひをうべて立て先此地と玉は万とつうへなほ世の
玉へく上古の玉生るゆゑと傳文と獨ちふ唱へまし
ましのゆゑと云ひて



白
日本後紀祖武天皇延暦二十三年冬十月壬子幸紀伊國玉山
又二代實篤元年冬十二月廿二日丁酉紀伊國正位上玉山
神授從力位下 又扶桑畧記延喜二年二月七日授玉山真明神從

五位上

又宇津保物役吹と巻上れ

年を経て唐の下にて玉の神たるをめあんみどりしる あやーの君
ねあつあ立身のうじやがなづる様とりでまほは
玉づるはあくつらぬのたまひ下せよまう人あら
このみ其證あらむにゆきて延く玉出る様くつりを常はへ給て
たぬけとせばげきうち極のあらうもつる詔書もく考るす
神の皇后新羅と征一たあるとた千珠滿珠の二點のちに際
たまひゆ山浦のとくに玉の神へててつよう脚くまうろ
名はる一あらび一其訓陣しもんれんく松原の國

務ち水門より當國日ちよしとひめの紙靈珠と
まろ地ちよどがみに此角之御船よをせなまひけんを
崩御の後參奉まろとひりんより由縁ゆえんあまじあら
千萬二珠の取くわくとつ人ひともあしと皇后
の拂卷ふまきと撥ばよ海水瀧圓天運うつう國鳥海平ひらと
御三珠みやことくちくとくちくとくちくとくちくとく
御牌みやびとくちくとくちくとくちくとくちくとく
千萬二珠みやことくちくとくちくとくちくとくちくとく
き——とくちくとく

新拾きみるをゆで
君うち玉出に岸にあらわす
ひらまつちよ
千代もくの
津守國平
あらわす
あらわす

其事事おなじのやうな教合社頭税とひら其社のうご合
をもゆく地の名所とせざりよあらむと作考ある人
あるはづくとよりわざわざたゞにうの二乃屋と泉州飯七
の地又納らし宿代とくらべ奉アカシム明和とつてひれ
一直まぐれぬまつた小も往吉が寧やうの水とおんばん

「社底背二社中背三社表背四社朴又說社天原二社宇佐
男命二社男命三社表背男中背男四社朴又說社天原二社姫
底背四社朴又說社伊勢一社表背二社天原四社玉作日奉紀
松記云社名腰曰根作圓住吉郡住吉座朴四座次相嘗新嘗
說曰赤四座者神乃皇后坐別殿授鑿中河社也也先師
翁老之主於吉田社之内二社之度是社乃皇后所居也
又錄之赤之神乃皇后之說而玉作矣
玉作有明社號之說者曰國基黒代傳者也
御之宿也御之宿也御之宿也御之宿也御之宿也御之宿也
御之宿也御之宿也御之宿也御之宿也御之宿也御之宿也
皇后之御玉作有明社也社也御之宿也御之宿也御之宿也
皇后之御玉作有明社也社也御之宿也御之宿也御之宿也
皇后之御玉作有明社也社也御之宿也御之宿也御之宿也
皇后之御玉作有明社也社也御之宿也御之宿也御之宿也

住吉は御多所よりおまえ十三と称すの日より印の日と
おもく衆人を召すつゝもえりて用に神にまつて御内侍
おやこの女から思ふに吉ふ玉出る玉生の岸あり彼皇后
をもとより即く也亦乃ちをひととも呼ゆる迄ある
べされよ子箇の二体ハ紀伊國日本宮に在りて是
則古にほんてをもあぐ一日あくまで名神の處乃
南嶺の山不在して也亦と其處の持神ト小び附むりと
あせり納め一ノ奉は日本宮ヤマツチモウカシム但
きども其關係どう亦と往つたまふあぐ被泉川櫛飯比
野川水井川等の地名を長門国を浦と云ひ此の
弊の名水の水の事と有るよううへて然る云皇國語の
高木翁浦にて御神を置くといも翁の御神と
称へん國の河川水井川等の地名を長門国を浦と云ひ此の
弊の名水の水の事と有るよううへて然る云皇國語の
翁の御神すと云ふたがいから

私翁川口に御神と申すが御地と申す翁浦と申す
より御神も同様と申すわすの作と申しけれ共
を後の人口と申すと申通並るつて内圓の水泉
が有るにぬりて本地接らぬ清きにて跡出る
より御會あらんと申すが御玉雅日か尊と申すと
つて翁浦と申すに御會アラクシヒキタルと申する
想を申す極く論くふと續日辛紀と申すと申す
帝神社元年十月辛紀伊國と申す郡玉津御の頃宮
留十有餘日と申す日登山望海此間最好不学遠行足
以遊後改弱後名為明之浦宣置守戸令荒穢
春社不差也官人貢祭玉は島之神明之靈ことを
りくりよと申す玉傳之の御と申すの御と申すと
記されど上件の況より玉殿の御事と申すと

玉出嶋



作名是考の第へはのや
海津東十五秋の巻にて大内言へてすがるの御所をも
大内人をもあらうとやくかくさううみをもあらぬものかとほんのり
りそくよもゆくもあらむかのりとてくらまつはきさうばせをも
つづく九月ニ年支保ひをもけし

きうぐりけるうどめのちう

アサヒのちいさくの浦のゆまと和モキウケトム 大内言海世
ウシテ二年四月十九日勅撰へ奏マリレケハ手を續千載トソクテ
意憲は師のあす海柳村
セウスの松原とこの外屋より八千代ノ松と之ん

わよしよの浦の浦を立つて山也玉傳院

滿々とく鶯のナシカのふ白

松並くおちうむちやや 月の川 ま 因

名月やいふくけて浪のむ 柳風

月 玉津萬祠

林羅山 道春

百世外蹤何處尋。明光浦畔古宮深。
報鷗蝶音網住允恭天子心。

月 玉津鳴

江邱綏

北海

白山一望画図中。勝地相連趣不同。白石參差雲
海寺青松掩映玉津宮。鶴飛蘆渚潮初至。龜曝
苔岩路自通。以右扁舟堪載酒。探奇何用浪西東。

山根のとき

乾樹

家集

玉津山 岩根のそじに波ふ尾ふもまのけりうの浦波

一條内府公

狂歌

源兼昌

季

吟

水

角

王津山 岩根のすじに波ふ尾ふもまのけりうの浦波

源兼昌

狂歌

一條内府公

季

吟

名日やうすぬわうのうなまつるぬ

淡也

零雨よ衣通姫う素顔さん

老門素道

風雅う事仕は玉傍徳ま活の假借とてもく

允府

藻脣にいのあうひあと玉庫しゆ

亭

玉出寫

見あきよとくとくあれうお下にあら

縫古ねうね浦よ候もうる藻塙州う集てぞ玉もやけふ

大上天皇

物ぐくとく玉のあくまく御代うあうねう浦浪

後花山院入達
もと政光臣

玉來みゆの浦やうたと中のうすも廣やうのえをもる

入達も大政大臣

口れんに深むまくよもうほん玉の光どもほりの郎

後山位皇子

縫千持明屋敷う集とさべてすとくほんぬ

後花山院入達
もと政光臣

ゆくのやうやうとんねうの浦やうひきとくのひふ吏そ

左參議高相

口若のうやうん埋川玉と今う成浦く林とあくじ

左參議高相

口わめうにえもひうり玉のぬねすりをうれ物あすす

左參議高相

風雅影の浦やうとてすとくとく藻脣を縫う玉のうだ

大和守時

口せうふううもむくにううを深うねうのううう

後泉大夫政大臣

口玉うら藻脣ううたううの浦よもくううう集はる

達知門院

口玉うら浦の浦よもくううううううううううううう

徽安門院一條

口わうの浦やうとくとくとくとくとくとくとくとくとく

等持院達知門

口若浦にううううううううううううううううううううう

法印定照

口わうの浦に玉うううううううううううううううううう

後西室主入達

口君うううううううううううううううううううううううう

おうう收大臣

口縫うううううううううううううううううううううううう

よみへへ

口縫うううううううううううううううううううううううう

家

隆

口縫うううううううううううううううううううううううう

家

泰

藻塩井をもとす。浦に残る玉も持ひてつ

三宗教王

冬井 あはれの良平くらみを嘗めずともわちのうの良

家傳

家集えの浦には唐よりかよせのあとを先持ひされ

ち一家

隆子 つみの百あねをとどめの外はもがたれ

雅有

浦川 代くねく植へひはなすをわす浦はよき袖を

雅俊

新榮 ねすの浦の玉衣もけんきとなりうとうとく名無

右共富盛臣

日 あはれやほ代深くねすの浦よりは玉衣人世も

後村上虎師製

お家まつ集と御活きよしとく

雅文

まき あはれやむそじてうたふ浦をもくすねゑのゆく

ウタキ

日 あけすよひよとむわのうれむとひてよひてよひ

頼阿法師

西櫻 わすの浦ろすととよとよとよとよの玉のひりを

内大臣

日 つうの浦よとすよとすよとすよとすよとすよと

家世

家集君代は諸のものとすて深しんわす乃とくま

雅

文明 あはれよほれ諸のものとす玉おとてへわのう人

伊加奈良登

雪玉ひろ 捨へぬよもわす浦へよきくまたほやきけん

家世

日 オあとゆく多かたわざの筋やもとすつと玉のうと

家世

手根 えの浦よもじてもわすさん筋の筋見玉よきく見へ

微

ち合 えの浦よもじてもわすさん筋の筋見玉よきく見へ

家世

妹背牡蠣 え産にてへ地筋の品物を

家世

弓海 ひだ相院 集ふれあり 本尊 祈迦佛脇士 要の作

家世

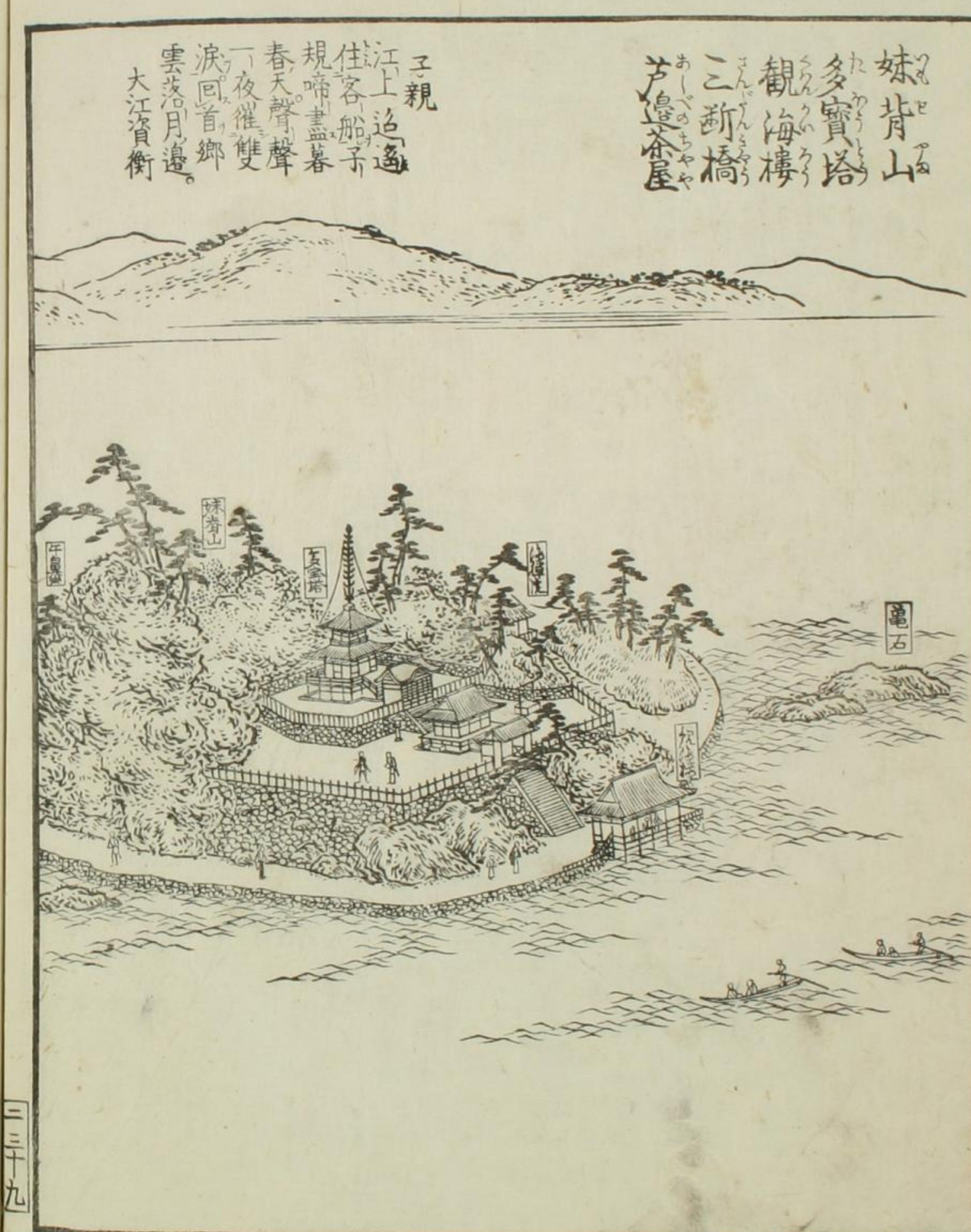
不動堂 博多不動明王 勝景大作

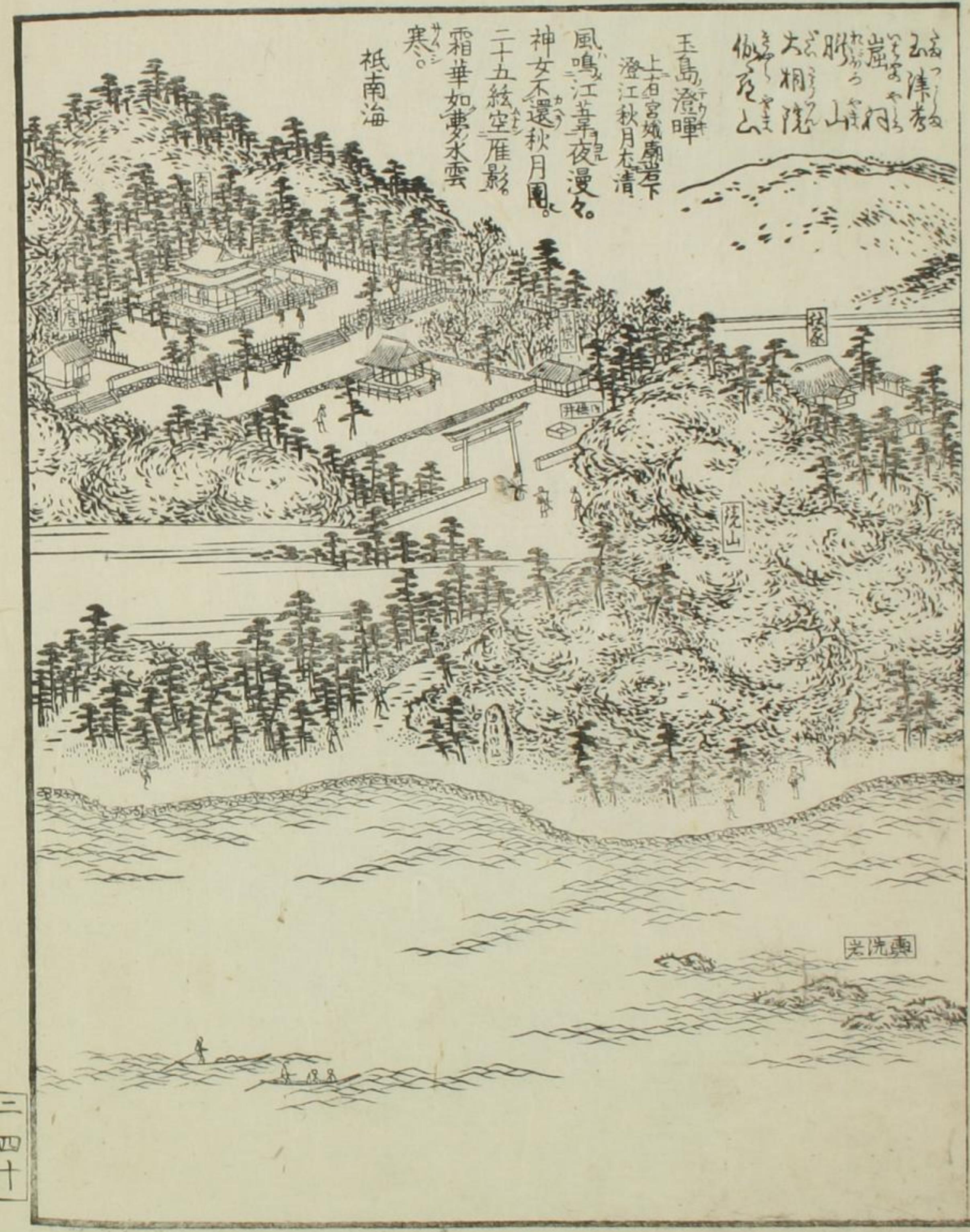
家世

林泉風景皆雅緻はとひも内櫓の置ひちうとを南ふ
りてあくま屋風と立つがとく千かれ聳え方丈の書院は臺
庭うち名所に號大鉄藤亭余考樹怪石の多みすら
れども此絶頂よのやう手へ木の根岩とんすら眺

林泉月を幽雅うへはとへよまゆ樓の遺跡ちうとせ南ふ
じうじあくと屏風とすうがごく千刃に聳へ方丈の書院よ臺
を度きうかたじ縦鉛巻藤草余考樹怪石のすゑもてぐも
れども此れ絶頂よのやう手へゑ木の根岩とんすう眺
金とうふ用ひあんぞゆくとが行を生べ
まくら天陰のあらうより玉はしのぬまごね林りくあくとせ比
わきねてもとくにうらうよくふるうと御年老と經らうん万代守の
ねうへくむね根とくとくと御年老と經らうん万代守の
うふあくすまくはぐくさくうねとくとくと御年老のせ本ちうと
後代雪緋うねきのね原うねうねうね金へうん玉はくら
ま本すタあらの春う塩亭の春うそ震えきとね原
日 月
れあくまうちううがくとねうのね原うあくよ
西櫻まくらうねまくら白雪とくらうふえやくねうのね原
柏玉塩亭没袖うふとねううよくねうのね原
雪玉うふとねうのね原わう塩亭ゆちふとね原
二七八



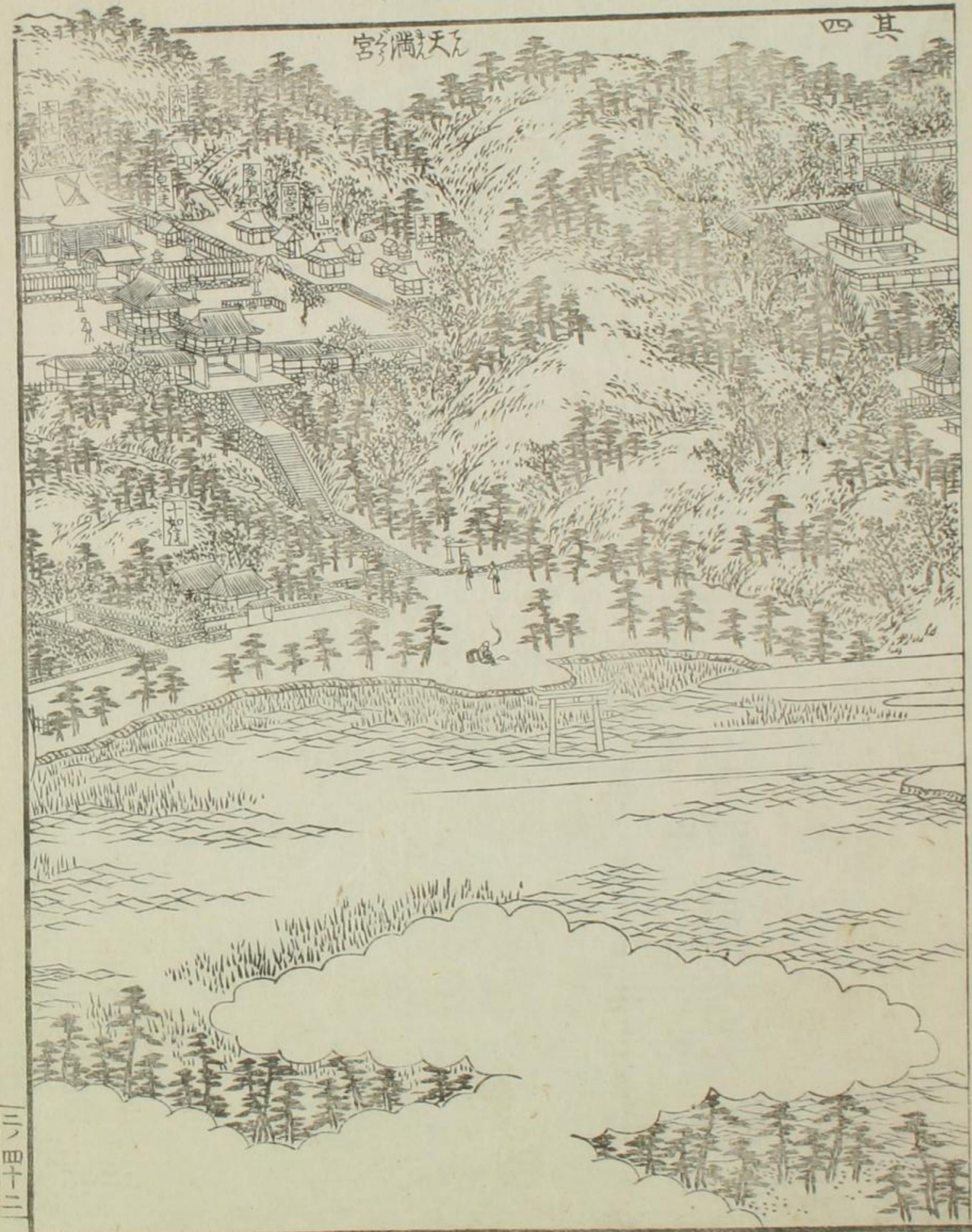


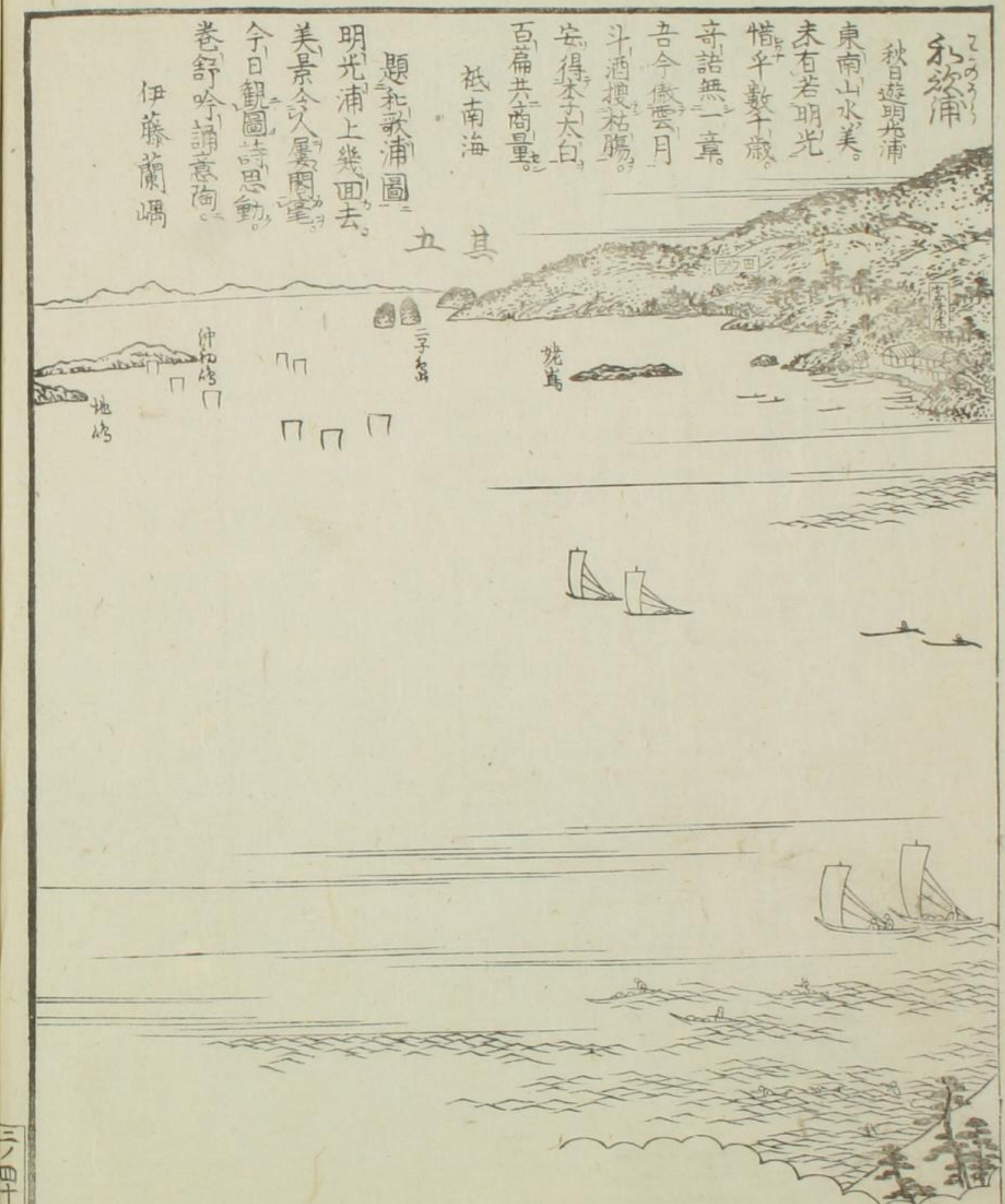






二八四十二





當御宮へ元和六年庚申の歳乃御造宮下は歟山大佛を慈眼大師の圓山ちう御幸地の藥師瑠璃光如來よりく相殿に之摩院羅神が日え山王権現立たる事無く

東嶽三官と称し奉まつる思ひとも 神君而在世の御事も令ゆ追ゆ思ひをもよ天元龜の間天下援丸と武將衆人にそし織田豊臣の丙將軍とぞきり修よてば無事に屬にとどまる是故よ偏ゆく文よ疎く意よ眷びの安よアシとあくび未發行わく參じのわやまことにあくひ乱さむことせんむあく

神君勅坐とぞ起ゆるもひてひ戎衣とく先使と平げゆく千戈の霜とぬ陽と消し長の草の紫と春月よ麻セみてとたゞへ廬間よどる紅葉のゆゑび枝采に揮ぐ

御徳ハ

御神号にもいちらるく

而影のじしまる陰ひやうとく 御代くよ宮の仰ひとく
龜の尾の縁み色をあすそひ鷺の聲共とぞあつく
候まつるくわ莫名の 因ひもふあくにや 勝徳と
申も恐多されとも麓よう山上よあく石塚な方よりひ
朱の玉垣矣深く林臺の後翠よ映若くと辰の幽邃と礪
神威れづく巖よ共まれよ不の靈地ちう賓殿へ山上よ達て
三葉四葉よ告をし 美を一輪巖よくとほんの眼まく
奪ひ歛赤の桜花二千朵の山よううつゝ本く栄華の色あと
あら甚衣よ傍ろね樹のれおね原のじつとしてふ秋の
翠色やくゆ

御祭れ事

毎月十七日 樂舞九月十七日御山のすく廻小路と相撲あり
年中某月四月十七日のかとれの自餘の日は木曜日御山の

ゆきとよし御旅所すゞく様を乞ひて、誠に准とよみの地も
ちく都鄙の老弱袖ばほねく、惟とほ裳をりて、幕也

あん室も雜沓つるあつまつてせひを

御神輿の渡幸の當日辰の上刻にて、例時御旅所と遙かと

羣ぐれ衆も公清あらる供奉の様よりおも満りて枝

擧もるとあざびとくども在兵仕事ありものとひ

○長刀振あく不振○赤母衣すく白母衣

○連戸五人○棒振六人○左敷二人○右敷二人○拍子鉦五人

○笛三人○蛭吹三人○桂振四人○雜鼓涌五千人

○笛五人○千合二人○餅はた八人○桂花二人

○持扇二人○笛三人○左敷五人○笠覆二人

○支餅の事の神代のむすうとう始りて先船もよまこはめぐら

わくじよまことせよ持とよくえく造酒まつ神くの中にも

下戸ある神へゆく納まおんじよもよは餅の搗く神供よ持

にもちく丸く市ふらまくもあくべ立風十兩よほく氏の吉平東

と持てく雀確る等よひの相ふと今セ卓傍る燈籠とも柳

たうはまやあく孫ぐぬきうあくべ立風十兩よほく氏の吉平東

長を手合の婦とて八人の持物をく絆云圓を敷の役くま

れのくわいとてよもよ拍子よねく催すとて踊よ齋の會を

あくじよまよくじよく身すよねく戸と山御代の名脇と向白優衣也

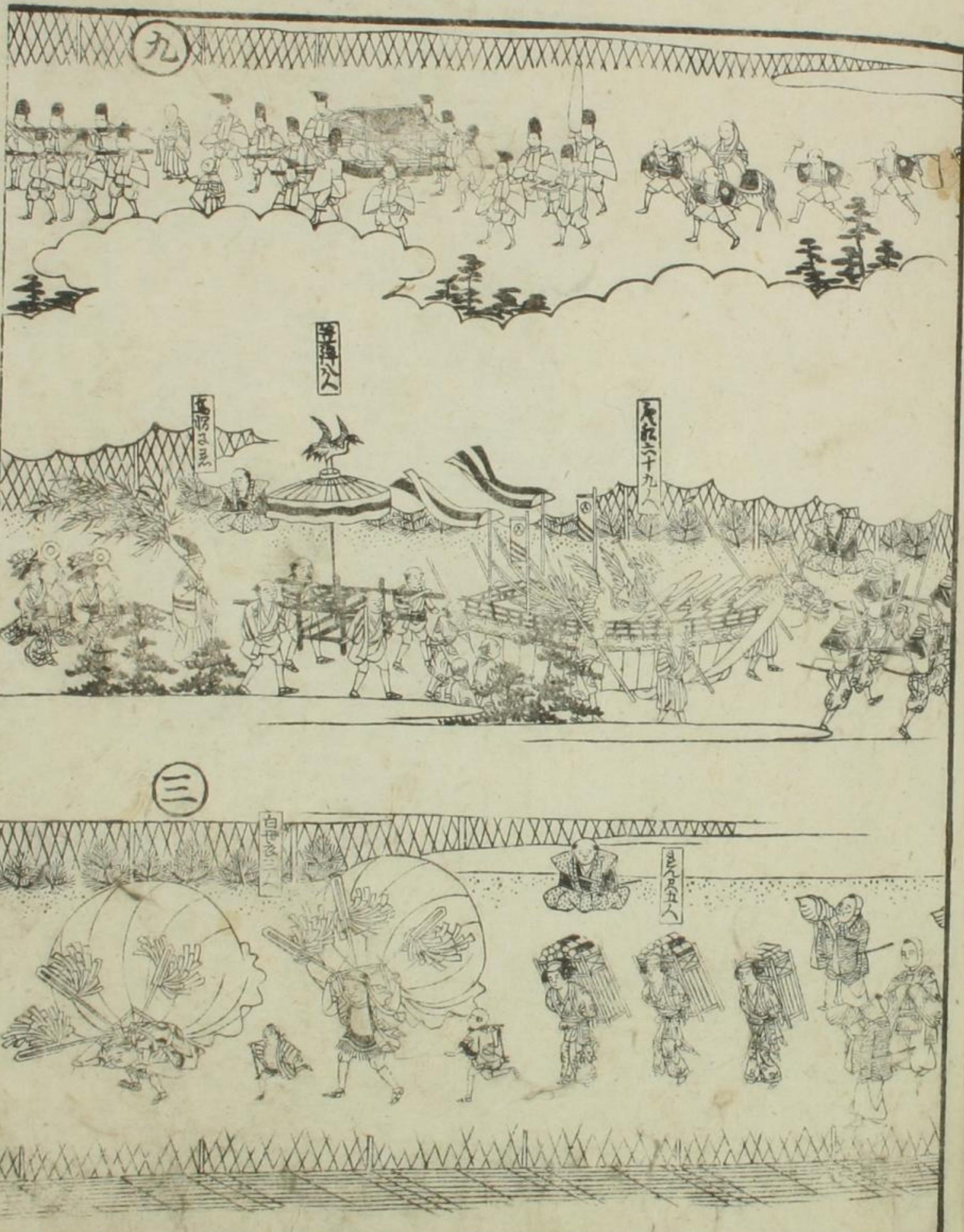
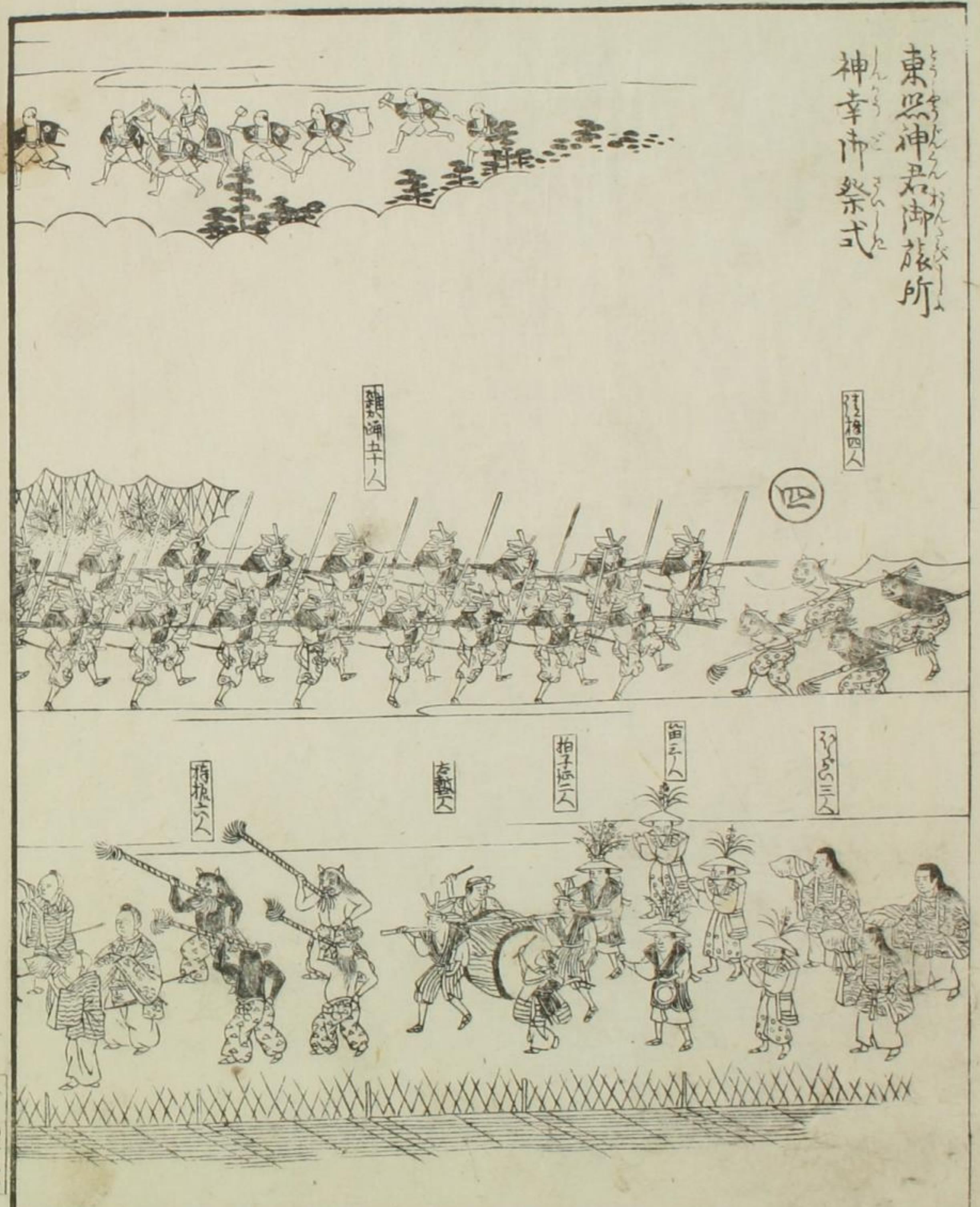
此れより中絶する。元和十三年正月山青霞もたるよ

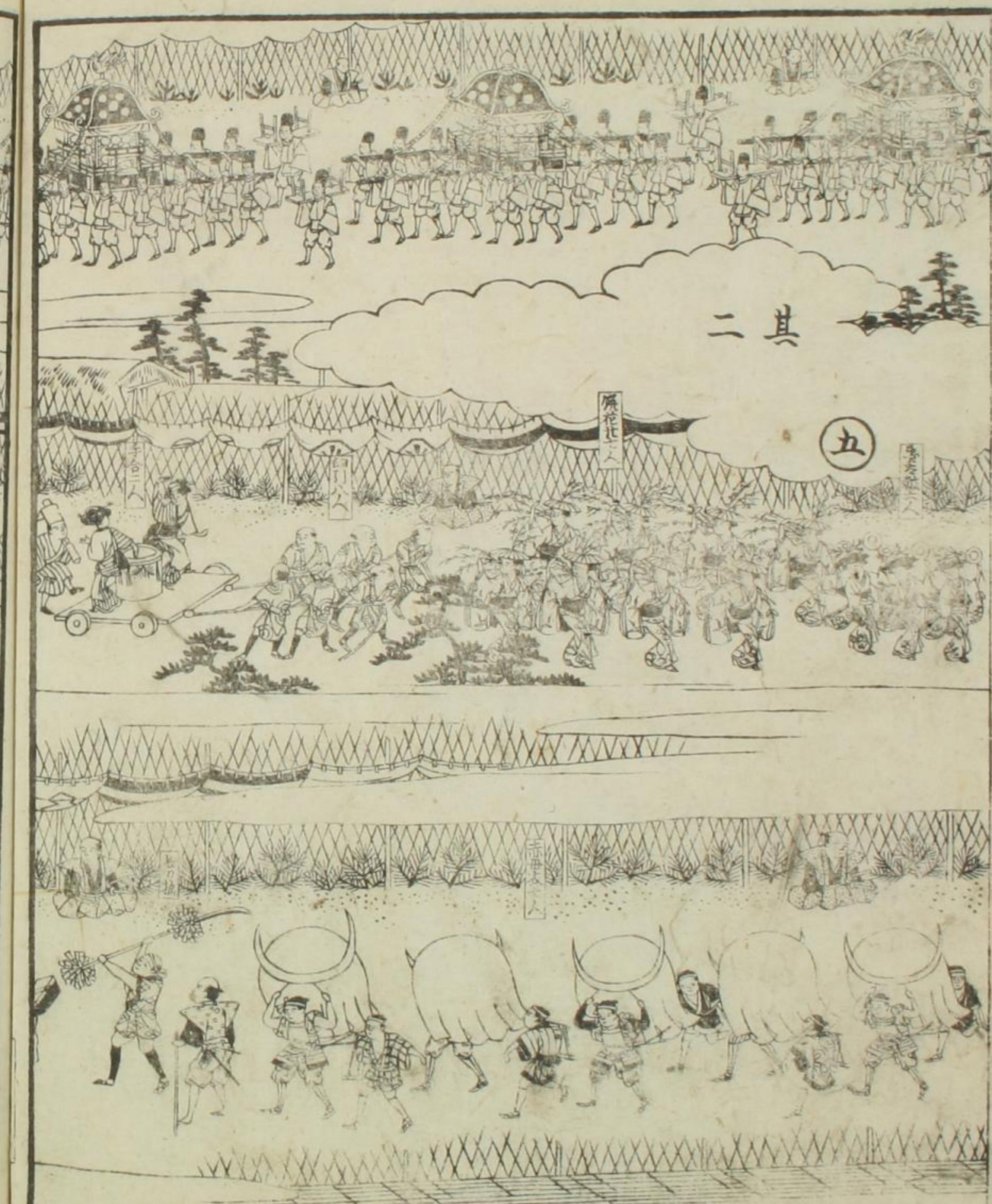
其舊をすて新よ二の作手をうくこと再興。貞徳ハ丁酉

因曰

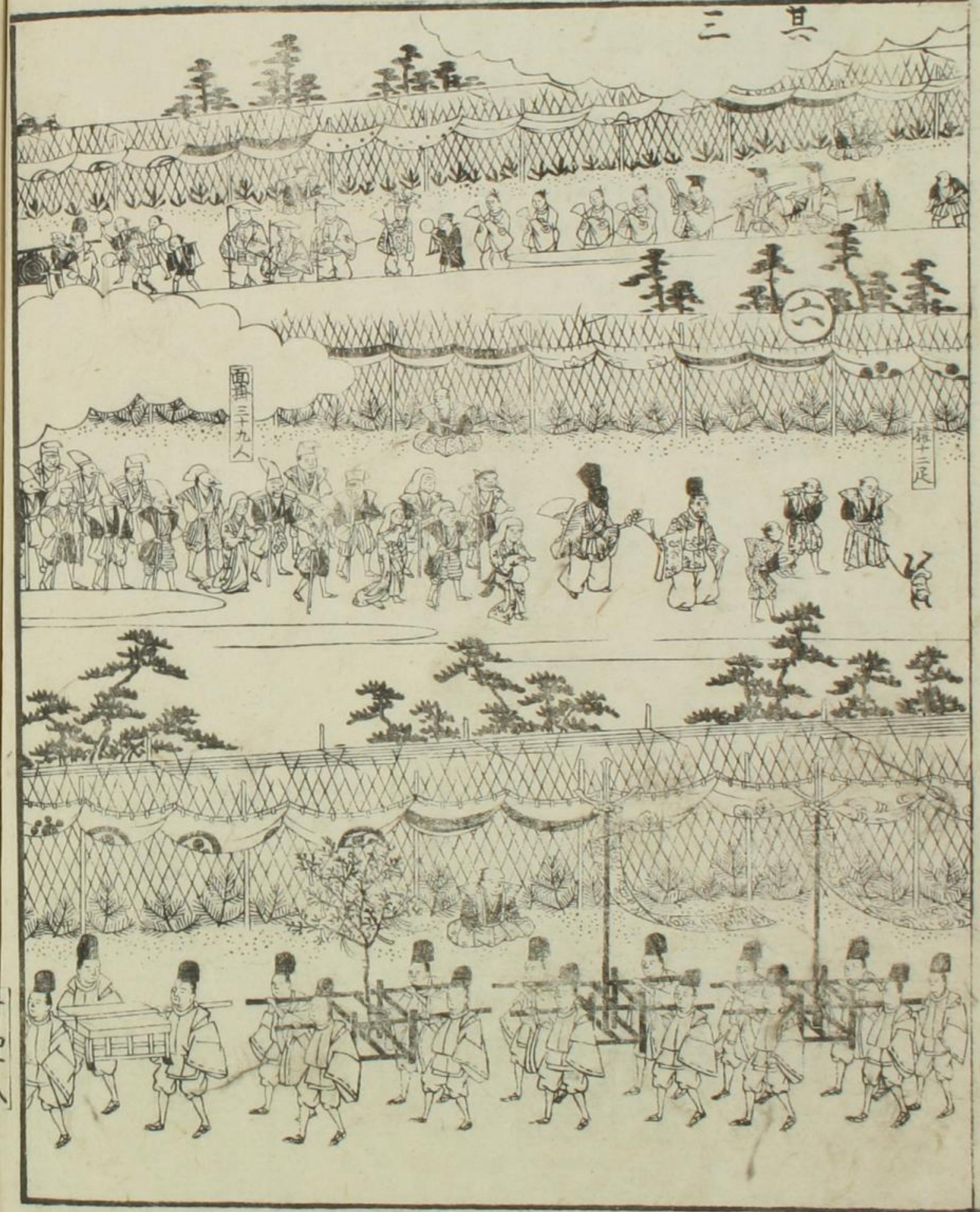
ようは後とはしも

東縣神君御旅所
神幸神祭式

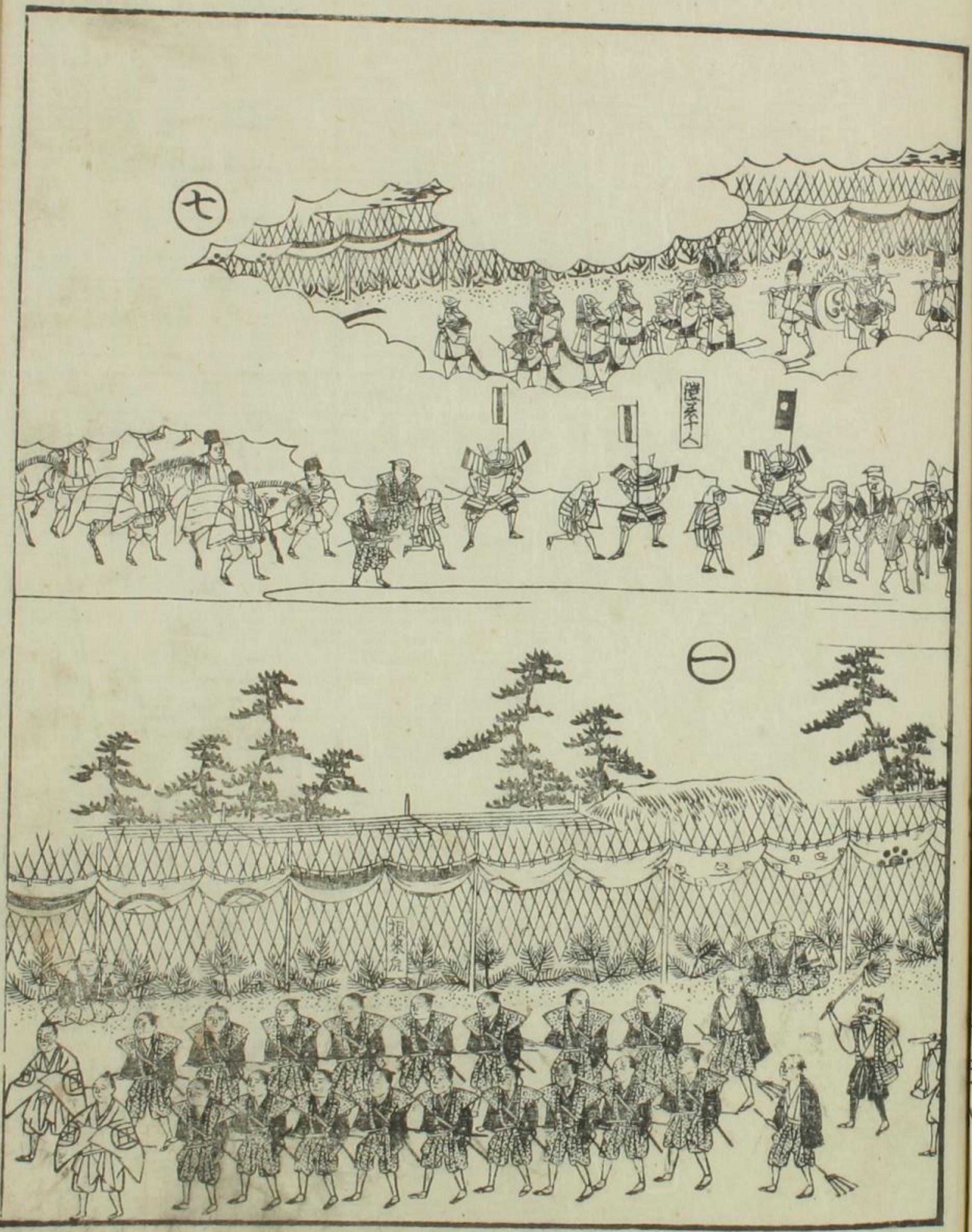


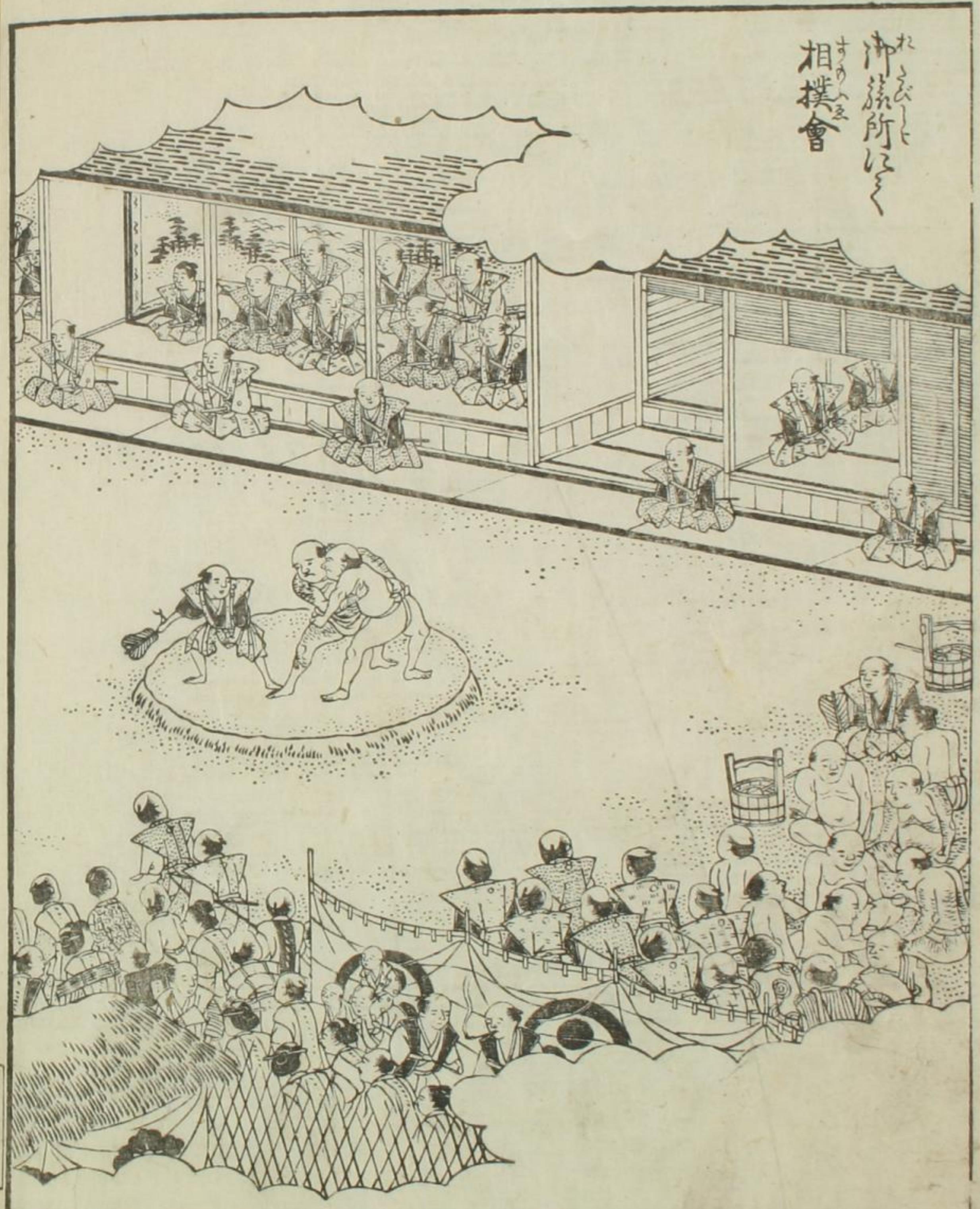
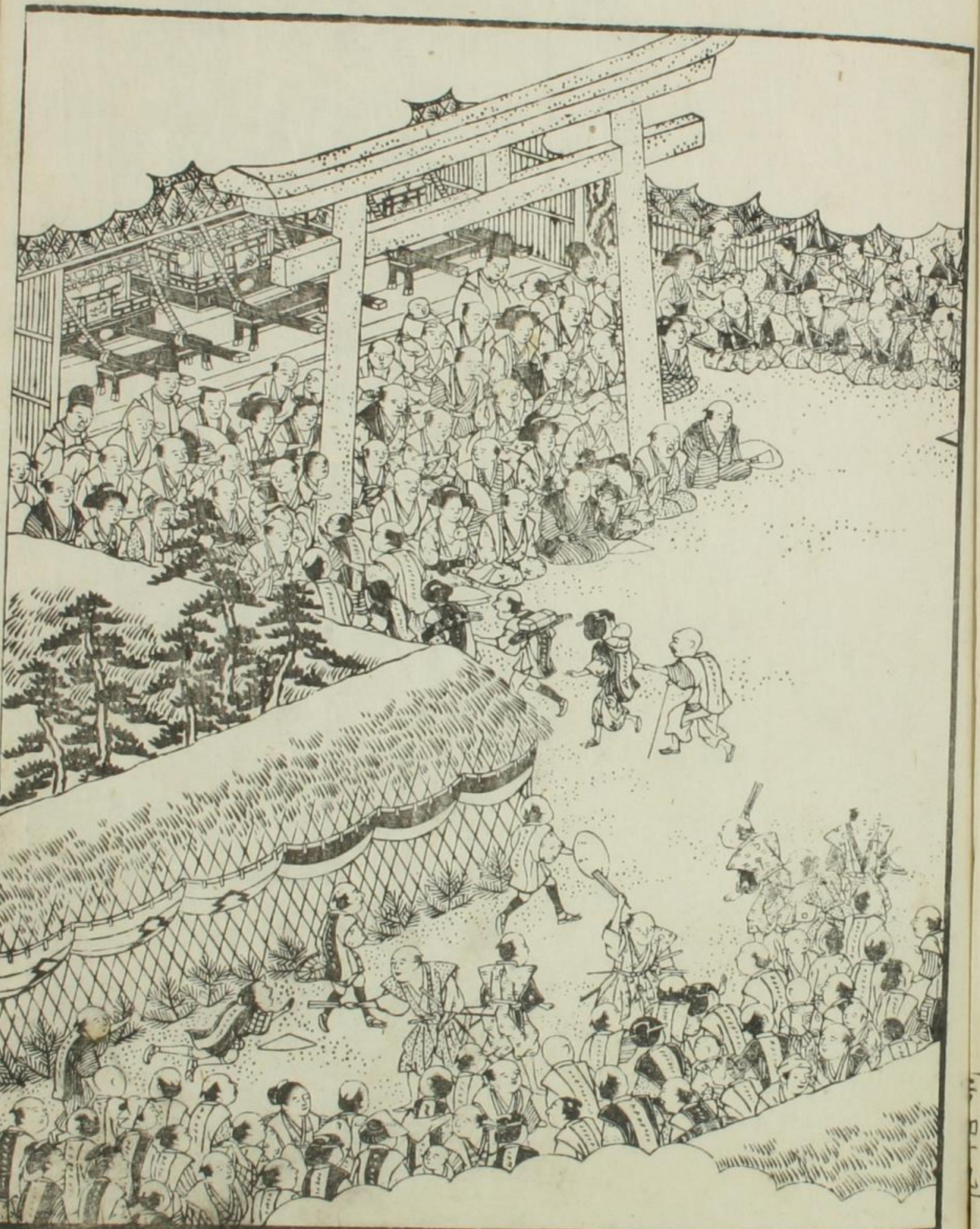


其三



七





天滿宮

陳四宮御官の西の山にあり

山殿當社と

拜殿

秋仙の後ろに

筆を

樓門

近御御基の神籬より

本社

白山社

三蘿園の御

伊勢兩皇大神

牛の画

九日塙え小兵衛

誠と書

氏名

原の人に

の机

もあり

上京のまと

の年

の机

重建新社神廟碑銘

藤敏支

於乎神君。姓董。二字諱道真。世曾儒宗也。

南紀和歌浦置神廟者。遞代尚矣。今國主豐臣姓淺

野氏。幸長公就昨土之封五年。相舊制之謐陋而於邑不措。鳥然神之主先成民而後致力於作鑿。鑿開兆域。依崖壁疊鉅石。躋攀峯嶺。百工子如來。行堂不自以居矣。刻畫萃彩。丹漆黝聖。迄褒褒之空社。然後集。自古秋梁公毀。江淮禹祀。一千七百區所存者惟夏禹。位子胥二廟。君子猶以為存位子胥廟未足是國主之於此廟可毀乎以新焉。可廢乎以崇焉。所為可為而云。七百年間。誰知家有再興之日。豈有碑哉。

羅山詩集云。倭教浦大漢宮者。未詳其艸創之時世也。其從來已久矣。或曰。橘直幹自寧府貢京師時。過此浦而始崇奉焉。今所存者。法也。幸長之所改造也。頃歲勝惺窩應幸長之求而作廟碑銘。然有故不建碑云。

董氏。勿風儒者。宗靈神今古仰遺跡。西都北界南

眞浦。二處祠堂一色松

和歌浦

松西南出。山中浦。あり上古の

浦。ハリウチ浦

多原卿

万葉

萬浦。尔白浪立而真風寒。暮春者山跡。之。所念。

吳浦。尔袖尤陪沾而忘貝拾。杼妹者不所忘。尔

續指。老の浪を。そ。ひ。ひ。ま。ま。ん。り。の。く。つ。の。浦。た。

詠花。美作や久米の佐野と。そ。も。う。の。浦。と。そ。ひ。う。け。る

大納言師賴

日 吳の浦。と。そ。ひ。う。の。浦。と。そ。ひ。う。け。る

贈左大臣

千載。紀年。の。浦。と。そ。ひ。う。の。浦。と。そ。ひ。う。け。る

連敏法師

新古。蘆塩。と。そ。ひ。う。の。浦。君。代。う。物。す。み。と。そ。ひ。う。の。浦。波

源家長

日 和の浦。よ。家。の。風。と。そ。ひ。う。の。浦。波。と。そ。ひ。う。の。浦。波

民。ア。範。光

日 美の浦。月。れ。出。す。か。の。す。す。に。夜。の。月。の。浦。波。と。そ。ひ。う。の。浦。波

多

日 吳の浦。や。沖。浮。と。あ。ひ。よ。う。い。の。浦。波。と。そ。ひ。う。の。浦。波

家。隆

日 美の浦。と。ね。う。と。ね。う。と。ね。う。と。ね。う。の。浦。波。と。そ。ひ。う。の。浦。波

寂。蓮



勅 りの浦ふ生すまの浜まの廩塙門とひ斗あわせ裏えん

法眼宗圓

もーか艸たむれやひるどん我身すみわみー浪
新 壮士さうしー契けいのとくそとん若わかなの浦うらのありのりのり木

行念佛師

おきの浦うらは廩ひら本ほんもる契けいをもき廩ひらの込こきをもる

俊 成

ねきの浦うらは廩ひら本ほんもる契けいをもき廩ひらの込こきをもる

西行法師

價後 つうの浦うらや陸りく手てはすむらうすみぬ波なみをえよもーに

前大政大臣

わきの浦うらや雪ゆきのもくをくと重おもてあるのきのきの花はなを

正三位知家

若浦わづらや廩ひらの廩塙ひらな門もんとおもをくわづらの浦うら

藤原為綱

り不ふ判ばんなあめてもひとあひおもをくわづらの浦うら

藤原師季

をたは廩ひらの浦うらの波なみよたらうれん

平時直

若浦わづらや廩ひらの廩塙ひらな門もんとおもをくわづらの浦うら

藤原光俊

袖そでやす形かたちをうりうからうに直ただのうへ

藤原秀茂

袖そでやす形かたちをうりうからうに直ただのうへ

正三位經朝

着き浦うらの波なみの下さ竹たけとく月つき生なる名な波なみのとく

藤原泰時

お太納言おおなごん為氏玉はるたまはお仕つかはくち合あわせしけじとく浦うら

權律師定為

私わたくし浦うらわのすはくと廩塙ひらな門もんとく集あつま

家

徳とくやうきの代だいの役わくを立て立たててあつわるわきのううあ

道洪法師

新後 わきの浦うらおは後ご雪ゆきもくしてせきにうるぬ波なみをやぢら

前園白大政大臣

つらうや立たて代だいのく清きよすひく波なみはすはく

世

新代あらり集あつなわき浦うら室むろた名なやあくのとさん

院 御 製

芦原あらはらのあくらうの月つきとよろがおもへおわうれうくわく

入道前大政大臣

若わかなのうに独老ひとりおかる夜よの野の子こはねがくまきせはれ

為 氏

わき浦うらわく名なはあくわく船ふね代だいとく田た野のもと

園いん白しら大政大臣

えく浦うらえくを迷まよ下さるみのひこの川かわをまくはれはれあら

剪きり衛え管かん教きょう

王葉くわ和わきくわに改かせくわすくわ濱はま側そをあらしくわめをとくわく

中臣祐信

日ほ高たかの浦うらのあやちあと嶋しまのこよの葉はもも那な

津守經國

日ほさつさつの浦うらのあやちあと嶋しまのこよの葉はもも那な

平 貞俊

日ほさつさつの浦うらのあやちあと嶋しまのこよの葉はもも那な

藤原景綱

日ほさつさつの浦うらのあやちあと嶋しまのこよの葉はもも那な

法皇御製

日ほさつさつの浦うらのあやちあと嶋しまのこよの葉はもも那な

藤原忠定

日ほさつさつの浦うらのあやちあと嶋しまのこよの葉はもも那な

平 貞直

日ほさつさつの浦うらのあやちあと嶋しまのこよの葉はもも那な

源 高氏

日ほさつさつの浦うらのあやちあと嶋しまのこよの葉はもも那な

大江高廣

日ほさつさつの浦うらのあやちあと嶋しまのこよの葉はもも那な

侍徳隆教

日ほさつさつの浦うらのあやちあと嶋しまのこよの葉はもも那な

前中納言定資

日ほさつさつの浦うらのあやちあと嶋しまのこよの葉はもも那な

丹波忠守朝臣

凡雅くわ後ご方がそそ小こ浦うら濱はま側そをああらしくわめをとくわく 紀 行春

皇太子御誕生千載集

前左京寺雅方

日ほ今いまれれ御ごりりととああらしくわめをとくわく 俊 成

日ほたたははりりととああらしくわめをとくわく 久ひ時

後藤左近太郎

日ほわわの浦うらの波なみよよううくくももちちととかかよよみみ 徒と二に位い頼れい政せい

源 宗氏

日ほわわの浦うらに立たるたる波なみのままくくおおたたもも森もり 五ご辰しん隆りゆう翁おう

五辰房正道玄

ノ

日ほわわの浦うらの波なみのままくくおおたたもも森もり 五ご辰しん隆りゆう翁おう

五辰房正道玄

日ほわわの浦うらの波なみのままくくおおたたもも森もり 五ご辰しん隆りゆう翁おう

五辰房正道玄

新千呂の浦みまくと果てに舟も今人をせひりつ

美原ち死

新後口あうに多ひうせはゆかの近所つりへらまん

垂納言親賢安

あくよわすの海よりすくいへねのあすみ

二谷ち永

左の波あらぬくらやう立つてもみどものこゑ

小櫻臣遠

見よわすの海の立つしゆくあひつふせ

美原高範

あうのねえ経る風のまふ色ちうの内路をひき

左大臣

そくがせんがくせはくみ八千石の差入浦

一品法親王寛子

及へた後もあんねんをもすみよつてうき

よみへり

あくよ羽あく一濱千鳥はすたむあくやのさん

順徳院佛製

あくよのひせじ波をうねりてうすに

弓

新續わすれ浦のぬともほよおうとひくすに

後八条入道

口あうに集くみうたぬ岸の邊ある浦代ひまくん

お内大臣

金波ねわむくみよすな絶れ波すよせよ浦とくや

良行右

ワの浦や老木のねよほあはれはれすきよあくひある

左太納言嘉定

えくねうのう波流すくろりのう

左大臣

まくのゆくもくうねいもまみとみうまく

瀧くへり

立くよくはくうにうなう五十く割りわすの波

あ大納言経迷

あくの浦やうわやうの波とすまかくたれまく

左大臣降侍

歎くよ若の浦波代くに波底くふもねうあうがと

三翁名詮

みくたまく代の波ようもうれねくう波

中納言雅世

みくたまく代の波ようもうれねくう波

法印菴運

みくたまく代の波ようもうれねくう波

大政大臣

日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日

新續

日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日

新續

日 日 日 日 日 日

新續

日 日 日

新續

日 日

新續

日 日

新續

日 日

新續

新續

北斎小集の浦はる代よりあらや道の舟もさんへん

法事宗助

堀川口の浦の手邊をふちくむれの舟をあらすあすへんと

云

実

支木ねぎはるまゆうきん羽衣ひどくかまくら御ひにう

真

風

わきせうたまく弱がふく

口のうね経有城をあらゆるかの舟もさとん走れ
口氣やまのほあひぬく老のよへよちくふちく
けんすきそし取代せ用すん拂うわきのう波

燒九味内大臣

大納言通典

寂蓮法師

くまくまわらけり

口のうの浦よお知くみのほほく目にはとやの瀧風

ち中納言定家

あまくまのうなまくまく代くわきのうとまく

白波のうすくねももきぬを筆のまう火かのうとてゐる

六條院宣旨

口のうや煙所とて行内移のほまればする日新

後久我大臣

ま本ねぎのう古見くみれをと眞もひうる船はまに國あら

信

実

口のうはひうるととや船すんちん御うねきく人

牛三の三

六百足うねあらむをの波々かのうまもよしん
林葉姿そ老の束くあくとめ袖のうへんづれく波

左

ね 家

家集もくとづら行院君のうれは波波波波波波のう

俊東法師

法補御臣

口のうあられ様よ持く度間をすまうん波されそ

赤深房門

橋ふあう東を尹うねかくうへんわきうんも立御ふう 無能ある

副奇

口千代までまご父代までりあくかすとよみがくとて 賴

賴

船

口うのねぎのうもは潔鹽州もくうた益波やのうん 布集

湖子

九

口のうのあくとよ塩や清うん舟とこあら田路の清

老若

清翁院佈製

君代のあらざる雪の舟の波とせしるあめううか

雅

經

匱玉

卷之三

匱玉
木の山の御代からまわる道をもとへて
長アラ宰相中やうに後宮の仕に従ふあくまで名前のおほく破れをもつて
御くわが身やれとあきらめのうれびをもく破れうて運うけりはく爲よ
艸庵
わきやかくもあくまの山をよこすと
わらは跡

日
ワタリや浪が岩の下へもくもくのやまへりま
百首
おりへきみにあらむおはしきあちよわすまうね
牡丹
文乃
すす浦の竹すみのりや艸むとさくらひやのさん
詠艸
園本
わざわざ風此にてよしわせぬほのかちとりがは
珠玉
ちぢる玉のうつ波せよみや花うる宿の初春もよ
政
タ
マ
隆
宗祇法師
天
和すのうれしきをあきらかゆ迷入我身のよきよ
天皇
富永王
天皇

日
まつもつたのあんちゆく
まつまつわすらうゆふ。
ちと酒言文教
紀物難詠遊わす浦
藤肅

邀遊諸客海城傍。瀲灩水光連彼岸。出網跳魚新。撥刺一聲歎。乃遂斜陽。

相羅山

翁浦首聞。今看猶眼明。蠔粘疑石出。蟹走訝錢行。
松下有漁到。廬邊奈鶴鳴。堆堆鹽竈冷處夕草苔生。
土腴如蜀府。潮去似盆城。衆興卽冷淡。山青水自清。
明光浦眺。毛界上。

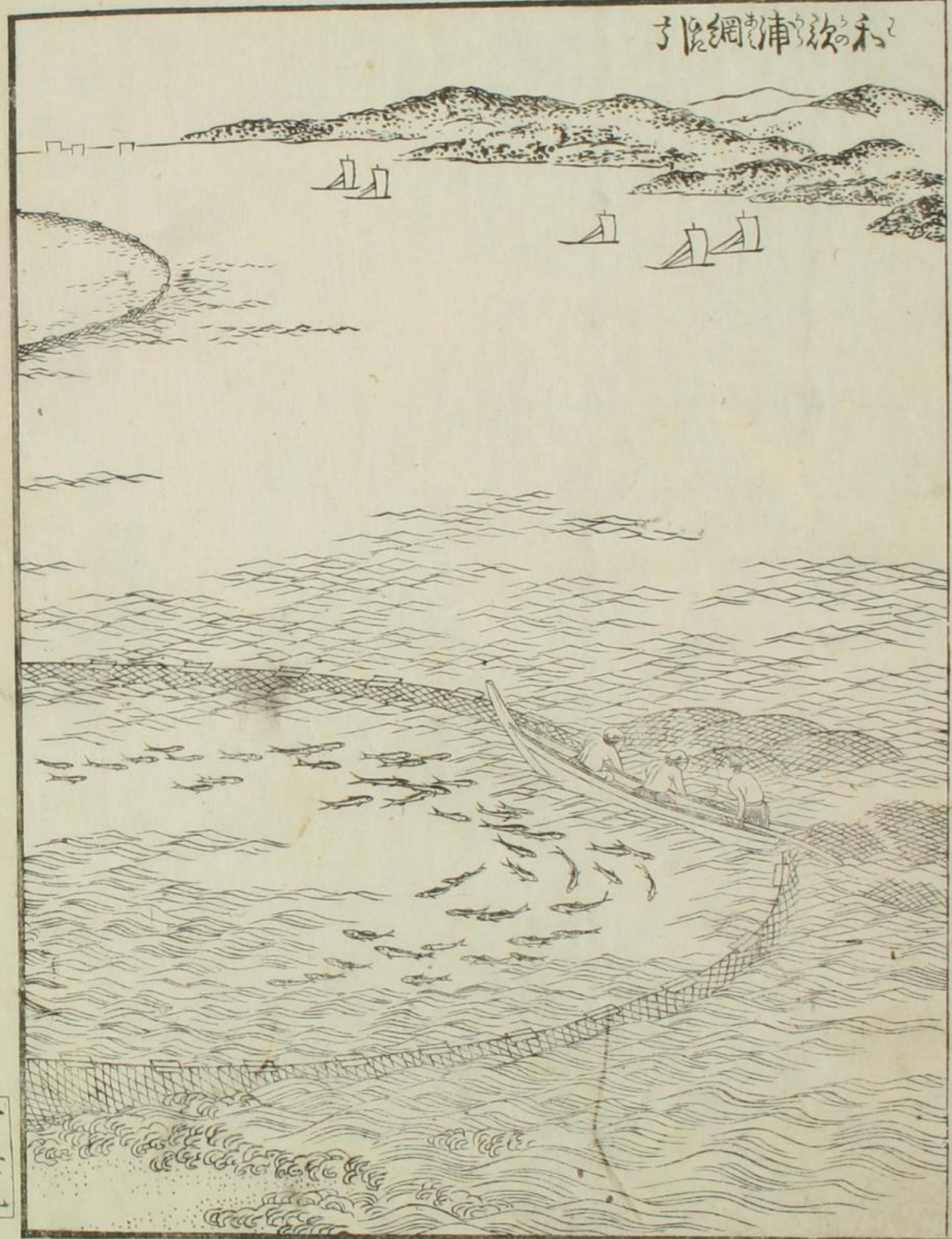
雨、岐、為、門、倚、海、涯。明、光、勝、景、素、相、譯。天、風、忽、自、南。
溟、洛、萬、頃、銀、濤、吐、雪、華。

追尋子深遊
和可浦
大江玄圃

上野義庵

明浦

子後網浦の木



二十九



乘興篇
船相尋
和浦邊雁歌波
點雲數泣雨如
烟沙嶼饑鷗仰
苔磯釣客眠南
溟殊不遠九萬
夕陽前

熊野老人

正月は
松亮二

上
三
桃亮二位、中野惟和が、おもむかの年下の男

卷之三

人をもぐれ西國へ居てから後よりけいふもむをとわひゆひもとあ
れあうあうへまうへむくはひくら二月十五日によこ立系所をも
あはるひくらもとくはり出里とく金人はそくはくわくたまひも
あはるひくらのくみ由本浦にそつたまくらまくらをく浪江のくび
も一門のくみれれ真一であしはくまくら日とまくらわく
さくら浦をくらわくまくらまくらとくらわくら
かくら浦のりくまくらとくら
重景御返事受け

卷之三

我立の室に風も
知ら便月をうそと
うへ生

我立てて宣教風まよひ候ら領月とううとうへ
石童丸大臣殿印の爲思ひ出うへんとぞいを
玉辞や強ひ遙れゆくねじるよせとあうとおぐ
そとも御ふれたのうきなまひまつりはの門戸の仲とぞくもる紀年
内緒とすりけり二月十日あるうのとすくらんの袖とて書く
うふ紙とて明かはきうしろへ立解りしるよう而わけ行よ押すやうら
うからびとあらんとぞくとくへたるに従候國あさのうとくとくをま
せよう吹上ううとくましまひたるよ一日とぞくのれり承れり承へる恨み
仰へしとくもくらううとくやうへからえをとくへそくとくとくをまひたる
ひくううのむちううとくとく長年候の居しむふのゆゑまくら候
ちくの隣りまたこれあがのうう度ちく
前ふ多う古木のゆう面

高浦の枝桑れわくをう勝地にて古くより歌詠多し
ま人一首は猶もさう東西也餘町ありて濱生る色濃
あじの田鶴波間りちぢりにさへ洋くたりあがひにあら
金剛寶寺のひれを悠揚として服ふ腰くもよきえら
東南に生石が峯はるるを白い御坂翠巒すく
そいへ横瀬へゆく浦塙集浦ろみゆく駕やく西南の氣海漫
四國の商船あらひに因東とつれ出船あらく商家乃
所はりも鮮すりえりくら西南の氣海漫
大鹏九万里の羽をむけあらうすれ初寫ゆくみく先
うりの千尋の底ふありひづる法士激汲ひとてのやみせ
まの業くらまくにとばしとくらまくにとくらまくに
の山くろ根の木の緑こゑすれにわざと海風よみだらん此
屈曲する立景色窈窕

一度たりよがどく誠に枝桑に寄矣の勝地とくべ

紹述文集

寶永己丑之歲八月九日周觀府城樓堞崇麗民物富庶。南
海之一都會也。自府城西行一里計而有裏海。有小嶋。倚
巖上有亭子可以觀海。援日妹背山遂詣玉津鳴祠而觀。和
歌浦。浦廻十餘里。西面稍南長岡連阜。左右環擁之地。嶋。澳。嶼。
峙干南姥島。雜賀崎。突乎兆。碧萬頃。厅帆如梭。風水相遇。
銀濤噴雪。勢如萬馬蹴浪。海南壯觀極於此矣。近村有亭生
齊酒者而供客玩而共步退灘地。浪花趁人。珍貝魚螺。蝶山
之類最多。旋採而懷之。遂上菅神祠拜。東照宮而歸。云云。

東照宮御旅所

日正の卯寄りあり每歲卯月十七日

續拾

浦の初寫

日正の卯寄りあり毎歲卯月十七日

するに浪波をさうにさうに霞が生れた浦の初写
日 すさん浦の初写をある日の夜あくつとす
新價きの波を冲の波間にさうにあたのとれる浦の初写
日 八百石鹽舟の浪の末はくに写ふ近をうのわゆ
支本 嵩山に高風送紀の事うれやくぬなうほ

考證并入道
あらぬとく
前中酒言定家

大仙言里光
称名院入道
内大治

松傳弘朝

家集

名 家

柏玉

後柏原院

雪玉

隆 実

白川

忠綱朝臣

翁の浦の初詣ある日もあややさんわづらと

来 家

今もまだおじ翁もんつてとも紀政うれ初詣

山

紀伊國志所圖會之二卷終

